
緋弾のARIA ～最強のフツメン男～

タピオカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア ～最強のフツメン男～

【Nコード】

N6450X

【作者名】

タピオカ

【あらすじ】

東京武偵高校の始業式、その日に彼は現れた…………。

漆黒の外套に身を包んだその男こそ、世界最強クラスと詠われる武偵達と肩を並べ、武偵ランク《R》、即ち八人目の『Royal』に名を連ねた最強無敵の銃使い。

名を小波トウジ！後に『撃鉄』の名で呼ばれる男！！

……しかし、確かに最強なのだが……彼の顔はブサ（ry
……いや、あまりイケてない面だった！！

二人の戦争

「……………」

血と硝煙の臭いが鼻に付く。

いつになってもこの二つが揃った臭いは嫌いだ。あの時を思い出しちまう。

俺と対峙する奴は、深紅に染まった妖刀を肩に担ぐように持ち、ニヤリと笑った。

「クツ、ククククツ……………なあトウジ、懐かしくないか？」

「……………」

どうやら、あいつも同意見らしい。しかし俺にとってはあの二年前の惨劇は懐かしいなんてもんじゃねえ。俺はあの時の光景を、あれから何度も夢見てるんだぜ？。

流石に毎日じゃないが、殺し合いの後なんて必ずあの時の夢を見る。起きた時にはガキみたいに泣きじゃくって、吐き気を催す。

「俺はあれから二年待った。俺が、お前を、この手で、……………誰にも邪魔されずに殺せるこの時^{いま}を……………待ってたー!!」

「……ああ、俺も待っていたよ。——、てめえは俺の手で直接殺す。『武偵殺し』なんて役目は関係ない。お前は、お前だけでは誰にも殺らせない」

手にした自動拳銃オートマチックと回転式連続拳銃リボルバーの銃口を奴に向け、俺は構えた。

「クッ……ああ……俺が女だったら今の一言で、惚れてたな」

「真顔で気持ち悪い事言うなつての、——。……」

「ただの例え話じゃないかトウジ。……さて、……じゃあそろそろ殺し合おうじゃないか」

奴はそう言つて、刀の切っ先を下ろした。

「……」。本気、なんだな？」

一拍の間をおいて、最後の確認をする。まだ、あの時の俺達に戻れるかも知れないと……あるはずのない未来を求めて。

「今更だな、トウジ。二年前から、……いや、お前と会ったあの時から、俺はお前と殺し合いたいと願っていた」

シャツ……カチャッ。

そして、刀を鞘に納刀した。

全身の毛穴から汗が噴き出すのが理解出来た。
あれは奴の必殺の構え、居合いと呼ばれる型の初動！左手で、納刀状態の鞘を持ち、ゆっくりゆっくりと身体を捻る。そして、開いた手を刀の柄に近づける……。

奴が使う技で唯一名を付けられた天下御免の必殺技。

名を『七天衝』

抜刀の初撃で横風ぎの払いを放ち。加速した刀、それを返し刃で二撃目を与える。返し刃をまた返しそしてそれをまた返し、……計七撃。それを刹那の時を凌駕して、『全く同時に放つ』と言う反則技。

奴にしか、奴だけが使えることを天から赦された七つの『剣撃』。天才を越えた鬼才をもつてしても届かぬ剣の頂点。

それを奴は使うのだ。冷や汗などまだ軽い。
あいつの技を知ってる奴が俺の他にいたらそいつが失禁してるほど

だ。

それほどまでもに、奴の抜刀術は死を理解れんそさせる。
今まさに俺は死を覚悟した。

奴の太刀筋はわかる。何処に来るかもわかる。だがしかし、光を越えた七つの連撃を、誰が避けられようか。

盾で防げ？御生憎様おあいにくさま、俺はそんなもん持っていないし、奴の太刀筋は全てが全て斬鉄の域だ。まあ、盾ではないが防ぐ術はある。
しかし、防げるのは七つの内一撃だけだ。それ以外は諸もろに受ける。

「……そうか、なら……もう話す事はないか」

「ああ、ないな……」

静寂。今ここにいるのは俺と奴のみ。それ以外の介入者は存在しない。

二人の決闘者は、互いに最強。結末は二者択一。

どちらかの死、あるのみ。

「……抜けよトウジ、どっちが速いか試してみようぜ」

「剣士が銃使いにそれを言うかよ。……たく、無理矢理にでも勝たなきゃいけないったじゃねえか」

苦笑を漏らしつつ、俺は両手に持った自動拳銃をインナーホルスターに、リボルバー回転式連続拳銃をヒップホルスターへ仕舞う。

奴に対抗する技は一つだけ。同質にしてまた異質。

それ以外の、他の可能性などない。共に生きる道はない。考えるな、他のことなど、考えるな。『敵』は容赦なく俺の首を刈りにくるのだ。手心を加えた瞬間、俺は死ぬ。他ならぬあいつに、殺されて！

故に、殺意を向けろ、敵意を磨け！求むる結末はただ一つ。鋼の心を持て！。

我が専心は、奴の滅殺にのみ向けられる—— ツツ！！

「…………いざ、参る…………てなッ！」

この俺の言葉を最後にして、俺達二人の、二度目にして最後の死闘が始まった。

……………しかし、その死闘…………いや、戦争は、始まりと終わ리と言つ言葉を同義語ではないかと人を惑わせるほど速く、あっけなく終わる。

人が届かぬ境地。 人が届いてはいけない境地。

銃を極めた故の『銃撃』。

刀を極めた故の『剣撃』。

形は違えどその境地の先、彼ら二人が行きついた先は全く同じ、『人知を越えた殺戮兵器』と言う答えた。

たった一人で一個師団の軍隊を『壊滅』させる力をもつ二人の衝突は正に戦争。

故に、この闘争は驚くほど速く終わる。あっけなく、終わる。

そう、二人は互いに必殺の一撃を放つのだ。

彼らの必殺とは軍隊が持つ殺戮兵器、『核兵器』とイコールだ。おなじ

互いの軍隊がそれぞれ核を放つたらどうなる？

……これは、そんな次元の話なのだ。

故にどちらもただではすまない。

どちらも、救われない。

そんな、救いのない、戦いなのだ。

黒衣の〈R〉

日本に帰って来た俺に課せられた最初の試練。それは外国と日本との時差だった。

そう、眠いのだ。羽田空港に着いた俺は瞼を擦りながら大きな欠伸をした。

約半日もの間飛行機に揺られ続けたせいか腰も痛い。いや、ファーストクラスと言えどやはり座りっぱなしはよくねえな。

荷物を受け取り空港のゲートを出た時、俺の胸ポケットがブブブブ、と低い音を立てて震動した。

「あゝ、こちら小波……」ささなみ「おお、姫さんが、久しぶりだな。んあ？
今ついた所だが？」

胸ポケットから取り出したケータイ電話の通話ボタンを電話に出る。

顔を会わせたのは三年前だが、電話越しにはこの三年で何度も会話した相手だった。

「確か始業式は8時半からだったっけか？つたく、面倒だぜ日本って所はよ。フランスじゃ堂々と遅刻出来て良かったんだが………わあってるよ、王家さまの『品位』のためですもんね。ちくしょう、久しぶりの日本でゆっくりも出来ねえなんてな」

俺は溜め息をつきながらもトランクを引きながら目的地へ向かう。

「あ？自分の家で？……おいおい、学生武偵に家なんてねえの知ってんよな？それ知っててそんなこ——……あ？俺は寮じゃねえだど！？学生武偵は世界各国、寮制度だろうが！個人的には嬉しいがどうなんだよそれ……あ？ここを右？……ってなんでナビゲートしてんだよ、お前今オルレアンに……衛星使うなバカ野郎」

電話越しに言われたように十字路で右折する。

地図データ送れば済むのにいちいちナビしやがって、面倒臭いぜまったくよお。

十数分後、俺の目の前に建っていたのは二階建ての一軒家だった。一階はシャッターが閉まっているがガレージらしく玄関は二階、レング造りの階段を上がる必要がある。

「無駄に広いな……まさか一人暮らしか？……だと思ったぜ」

ドアを開け、玄関に入った俺は中の広さに絶句した。

3LDKなのだ。

一人暮らしには辛い広さだ。

「まだ始業式まで時間があんな…銃の受け取りにでも……………なん
…だと？」

トランクの中から日用品を取り出しながら電話に出ていた俺は、電話越しの女の言葉を聞いて驚いたのだ。

ドタドタと音をたてながら室内を走り、一階へと続く室内階段を見つければ一階へ降りる。

真っ暗だったガレージの電灯スイッチを押した俺は盛大な溜め息をついた。……………こりゃなんだ？俺んちなんだ？武器屋か？

ガレージの壁にはところ狭しと様々な銃器が飾られていたのだ。なんか工具箱やらが置かれた銃鍛冶が使いそうな机もあるし…………。

「確かに俺は武器庫だのなんだの言われてるがなあ、自分の家まで武器庫にしたいとは思ってねえぞコラ！…祝いだと？……………祝いならなあ…食いもんとかせめて俺が嬉しいがるもんを寄越せよ！物騒過ぎるわボケえッ！……………い、いや…その、……………まあ嬉しくはあるがよ……………あッてめえ嘘泣きしやがったなあッ！？」

電話越しの相手に怒鳴りつけながら俺の視線は、視界の隅に入った灰色のシートを掛けられた『何か』に釘付けになった。

「——こりやなんだ？シートが掛けられたデカイ……これも銃とか言わねえよな？……いや、これはまさか……ッ」

シートを翻すように引けば、そこにあるのは漆黒のボディの大型バイク。それは、パリにて作られているはずの俺専用のバイクだった。

「アーセナル…出来てたのか」

車体に多くの銃器を搭載しているそのバイクの名はアーセナル。

「……ああ、サンキュー、姫さん。そーだ、あいつらに礼言つてくれよ。ん、……ああ、あんがとよ。……さて、じゃあそろそろ俺は行くぜ？早速使わせて貰うよ」

俺は電話を切り、壁に掛けてある銃の中から拳銃二挺をショルダーホルスター、ヒップホルスターに入れ二階へ上がる。

トランクの中から武偵高の制服のベストタイプを着込み、更にその上に真つ黒の外套ロングコートを羽織る。

再びガレージへと降りた俺は、MP5サブマシンガンを一挺、M1897ショットガン（通称トレンチガン）を一挺………その他マガジンや手榴弾を外套の内隠しポケットに突っ込み『アーセナル』に跨がる。

「さて、始業式と行きますか」

リモコンスイッチで閉じたシャッターを開け、俺はアーセナルを走らせた。

「はっはっはっはーッ！ぶうわぁーかつ！白バイ程度がこの俺とアーセナルに追い付けると思ってんのかよ！」

ちなみにこのアーセナル、最高速度400km/h越えの化物バイクである。勿論今は300km/h以下だ。

車と車の間をスルスルと抜けていき、白バイを撒いた俺は有頂天で高笑いしながら笑っていた。

「はっはっはっは………は？」

そんな時だった。

俺の視界に、パラグライダーに乗った少女が見えた。

グワァンッ!!

「今行くぜ！待っててよマイスイートハニーッ!!」

少女がパラグライダーを使ってる「非日常」イベント「つまりは美女（でない）と許さん」。

と言う素敵方程式が一瞬にして頭に浮かんだ俺は、下心丸出しの笑みを漏らしながらまだ見ぬ美女との出逢いのためアーセナルを少女に向け走らせた。

そこで見たのはなんの冗談か、『セグウェイ』の人が乗るべき部分にスピーカーと一基の自動銃座が載っていると言う、もはやギャグとしか思えんものが七台、武偵高のグラウンドの体育倉庫へ銃口を向けていて、その先に武偵高の男子生徒が余裕そうな表情を浮かべていると言う非日常のヒトコマ。ちなみにその男子生徒はイケメンだった。イケメンは死ぬ。むしろ俺以外の野郎が死ねば世界中の美少女は俺の嫁になるんじゃない？。

ズガガガガガンッ！！

七台のセグウェイは一斉に銃座に乗ったサブマシンガンを撃つ。

ありやIMI社の短機関銃、^{ウージー}UZIじゃねえか。

そして俺はそこで目を見開いた。

毎秒10発の9パラ（パラベラム）弾を放つUZI、それも七台の掃射を、その野郎は不敵な笑みを見せて全て避けやがったのだ。

そして、拳銃……どうやらベレッタM92Fの改造品だろうか……腕を横に屈しながらフルオートで応射し、七台のUZIの各銃口に一発ずつ銃弾を叩き込むと言うなんとも曲芸じみた技でUZIを吹き飛ばしたのだ。

「へえ、S相当か？日本もまだまだ捨てたもんじゃねえな……だがしかし、甘いな。俺だったらあと一基や二基、用意して隙を撃つ。ほれ、こんな感じに……」

俺はヒップホルスターから異形のリボルバー『マテバM2006』の銃身を少し長くしたカスタムモデルを抜き取り、体育倉庫へその銃口を向けた。

「…なっ！」

ガウンッ！

マテバから放たれた一発の357マグナム弾は体育倉庫の陰からス
カしたイケメン野郎を狙っていた、『八台目』のセグウェイを撃ち
抜き、小爆発を起こす。

「美少女はいなかったが、なかなか面白い物が見れたぜ。……ん、
流石に気付くか」

見ればイケメン野郎がこちらに気づいたらしく、視線を俺に向け、
銃を構えて警戒していた。

しかしイケメン野郎がいる体育倉庫とはそれこそ『数百メートル』
以上離れてる。話しかけるには声を出さなけりゃならんし、そもそ
もイケメン野郎相手に話す事もねえ。

俺は軽く手を振ってその場を去る事に決めた。

面倒事はごめんだからな。

「風穴開けるわよ！」

俺が所属する事になった2年A組、その教室のドアを開けて聞いた言葉である。

「どうしてこうなった」

「では続いて、アリアさんと同じく紹介をさせて貰います。どうぞ」

「あー、……俺は小波^{こなみ}トウジ。よろしく」

酷く気の抜けた自己紹介だが許して欲しい。今俺はとても憂鬱なのだ。

俺の名前は小波トウジ。（こなみと読むなよ？）中等部を卒業してすぐパリへと交換留学生として留学していた俺は、本来紹介する必要もないのに紹介しなければならなかったからだ。

しかも、俺が自己紹介すれば何故か十人中十人が残念がり、首を傾げる。

もちろん、首を傾げる理由はこの服装だ。しかし、残念がる理由…
…その理由のせいで俺は憂鬱なのだ。

「……不細工」

「ビiiiiiii」

「顔が……残念」

2年A組女子一同の言葉である。ちくせう。

しかもさっき風穴がどうか言ってた美少女の後のせいなのもあるだろう。

あれだ、旨いもんを食った後に不味いもん食うと不味さが引き立つようなアレだ。

そう、はっきり言うと俺はあんまりイケてない面なのだ。
コンプレックスと言っても良い。俺はイケてない面なのだ。
女の子達の失望の言葉が俺の硝子グラスハートの心を粉々にしてゆく……。

「あーッ！お前は今朝のバイク野郎！」

俺が心の痛みに耐える最中、突然ガタツ、と立ち上がり俺を指差す野郎が一人。

「あ？……お前は…今朝の曲芸野郎か。んだコラ、Sランクごときが俺に喧嘩振る気か？イケメン野郎は問答無用で殺しに行くぞ？」

俺がイライラしてるのを知ってか知らずか、野郎は続ける。

「今朝のあれはお前の仕業か！？」

……………？

「……は？今朝のあれって……セグウェイか？」

「そうだ！お前のせいでチャリはぶっ壊れるはこいつに追われるは散々だったんだぞ！？」

「あ？……助けてやったのに良いご身分だな。しかも俺はやってねえ。今朝の便で俺は日本に来たんだぞ？さらにさらに、たかたかかS級一人殺るのにあんなくだらねえ真似なんかしねえ。これで充分だ」

俺がシオルダーホルスターから拳銃…ベレッタM92Fを元に『造られた』オリジナルのカスタム銃、『ヴィレッタ・ムラマサブレイド』を抜き取り銃口をイケメン野郎へ向ける。

「ッ！……………」

するとイケメンは咄嗟にショルダーホルスターに掛けてある銃に手を伸ばし、……………——そこで止まった。

「なーんてな！あっはっはっはっ！んなびびんなんて！武偵憲章にもあるだろ？本来武偵ってのは人を殺さない。あれはマジで人違いだ、俺じゃねえ」

俺が殺気を納めたからだ。

「いやあマジでビビってやんの。流石にSランクでもRランクの覇気にや耐えられなかったか？…あっはっはっはっ！」

「……………は？」

俺は適当に空いてる席に座った。クラス中の視線は俺が独占中。なんだよ、居心地わりいな。

「あ、良い忘れてましたが……小波君は武偵ランク最高位のランク《R》です。皆さん仲良くしましょうね」

どこか間延びした担任の言葉でクラスは阿鼻叫喚の渦へと叩き込まれた。

[illegible]

そう、何を隠そうこの小波トウジ、世界最強クラスと詠われる武偵ランク《R》なのだ。

黒衣の〈R〉（後書き）

書いてしまった…………。

カレンデュラの次話も終わってないのに…………ハマってしまった！
！（笑）

……いやあ、面白い。面白いです緋弾のアリア。
何が面白いつて戦闘がギャグと化してるのが面白い（笑）
そしてヒス・アゴモードの金一かけえ（笑）

そんなこんなでオリキャラを考えているうちに、「アレ？これいけ
んじゃね？」と思ったのが最後。書いてました（笑）

まだどの小説も完結してないのに手を出したりして、あきれられる
とは思いますが、妄想が止まらんです（笑）

これまた更新不定期ですがよろしく願います。

スタイリッシュサボリ

「へえ、じゃああれだ。今世間様を騒がしてる……そのなんとかつて奴の模倣犯に、キンジは狙われてたわけだ」

「武偵殺し、な。たく、ほんと厄日だよ今日は」

「……………武偵殺し…ね」

「？」

「まあ、なんだ。災難だったな」

はあ、と大きく溜め息をついたキンジの肩を軽く叩いてやる。
なんつーか、可哀想な奴だなコイツ。イケメンでなければ良かったのに。

こいつの名前は遠山キンジ。自己紹介の際に俺にバイク野郎と言ったこのイケメン野郎の名前だ。

俺が体育倉庫でキンジを見る少し前に、バイクのサドルにプラスチック爆弾を込められ、そこを風穴がどうか言ってた美少女、アリアに助けられたらしい。もげろ。

しかし俺はロリコンではない。美少女だからってロリはダメだ。俺は女の子にはおっきな胸がないといやなのだ。NOペチャパイ！

今は昼休み。俺とキンジの二人はクラス中からの質問責めを逃げ、校舎の屋上にいたのだ。

屋上に来てから五分とせず、俺とキンジは名前で呼び会つ中になった。良い奴なんだがイケメンじゃなけりやなあ…………

「にしてもトウジ」

「ん？」

そのキンジが頬を掻きながら聞いてきた。

「…………ほんとに《R》なのか？」

「喧嘩売ってんのかキンジ？」

「いやいや、Sランク武偵でさえ珍しいんだ、それこそRランク武偵なんて身近に感じられないような奴ばかりなのかなって思ってたさ。話してみたら武偵の例に漏れず多少ネジぶっ飛んでるけど、悪い奴じゃないってわかったからな」

キンジの言い分は確かに頷ける。Rランク武偵とは『世界で八人』

しかない最強の武偵達。世界各国に存在する武偵達の頂点に『君臨』するのだ。

そんな奴と級友になる、なんて言われても実感が沸かんだろうな。

「まあ俺は別もんっつーか……一応一般市民からの出だからな。」

……っーかネジぶっ飛んでるってどっいう意味だコラ」

「そのまんまの意味だ」

「お前殺す。ぜってー殺す」

「武偵法9条」

「うるせえ」

俺はゴツ、と軽くキンジを蹴るのだった。

「大体よおキンジ、てめえだっけネジ数本ぶっ飛んでるだろうが」

「なっ……！……俺のどこがおかしいんだよ」

「UZIの銃口をフルオートのベレッタで狙い撃ってぶっ壊すなんて普通考えねえよ。普通なら足壊して終わりだろ？」

そんな風に言い返すと、キンジは苦虫を数十匹纏めて噛み潰したように顔をしかめ、大きく溜め息をついた。

「いや、あ、あれは……その」

「まあS程度なら普通なんだろうな。俺はそんな余分……余分でもねえな……なんつか、簡単に済む方を選びがちなんだよ。知り合いに言われたんだが面倒臭がり屋らしいからな、俺は」

そしてまた、口ごもった。

「俺はその、……Eランク武偵なんだ」

「……嘘こけ」

「い、いや！本当に俺は武偵ランクEなんだって！しかも俺はこんなイカれた学校、速く抜けて普通の学校に行きたいんだ！」

……この驚きようを諸君らにどうやって伝えられよう。

武偵ランク、それは簡単に言うと、武偵と言われる犯罪者の逮捕権限を持つ傭兵の強さ、または凄さ早見表のようなものだ。

最低ランクEから始まりランクSまでの六段階あり、ランクEは一般市民に毛が生えた程度。ランクSは世界各国から必要とされるほどの超エリート。その道のプロと呼ばれるAランク武偵が束になっても敵わないという超越者。

……と言った具合だ。まああれだ、ランクが上の奴と下のランクの

奴との差は、下のランクを軽くあしらえる程度、と言われてる。

ん？ランク《R》？……勿論、武偵ランク《R》の俺は、Sランク武偵程度なら束になって掛かって来ても殺られないだけの能力を持つ。そう、Rランク武偵なんつー奴等の仲間入りするなら、人間を辞めにゃならん。そう思えば、確かにキンジの言う通り。俺は『人間』としてのネジがぶっ飛んでるんだろうが……——そんな人間辞めた奴等、Rランク武偵に人間の域にいるSランク武偵が勝てるはずもなく、S以下なんて話にならん。一国が出来るくらい人数をかき集めたところで俺を殺すことは出来ない。

ただ、壊滅させるより俺の弾薬が尽きてしまう方が先だろうな。

……——話がそれたな。

もう一度おさらいしようか。

キンジはEランクだと言っている。七つの銃口に各一発ずつ弾丸を叩き込みサブマシンガンをぶっ壊すと言った達人技を見せたこいつが、『おちこぼれランクE』だと？

「……………ま、なんかあんだろつから深くは聞かんがよ、あのアリアちゃんにはバレてんだろ？……多分付き纏われるぞ？キンジ爆発しろ」

「だよなー…ってなん俺が爆発せにやなんのだ」

キンジもそうだろうと思ってたらしく、大きな溜め息をついて腰をついた。

ブ、ブブブブ……—。

胸ポケットの携帯電話が振動する。

「お？……おお、忘れてた」

携帯電話の画面を見ればメールが一件。件名は……『お久さしぶりッス』。

「どうかしたのか？」

座ったキンジが俺を見上げながら問う。

「こつちにほんにいる後輩からメール。銃の様子だいぶを見たいから来てくれ、らしい。一年も見せてなかったから大分ガタついてたしな、見せなきゃと思ってたんだよ」

「へえ、装備科アムドの後輩か？」

「ああ、最高の銃鍛冶ガンスミスだ。多少性格に難ありだがな」

そう言つて俺は屋上の柵の上に飛び乗り、眼下を見下ろす。

昼休みだからか、多くの武偵高の生徒がいるのが見える。

「わっ！？トウジ、お前なにやってっ……—」

「キンジ、お前《R》だつて疑つてたろ？……俺がRランク武偵だつて証拠を見せてやる。あ、あと俺午後の授業フケっからよろしく」

そして、俺はスキップをするかのような軽い足取りで……—落ちた。

ここは校舎の屋上。四階建ての校舎の高さはけっこうある。人が落下すれば簡単に死ぬる。そんな高さのある所からなんの用意もなく落ちて助かる人間なんていやしない。

だから、………平然と着地し、軽い敬礼のような事をしてカッコつけ、黒い上着を靡かせながら授業をサボったあのバカは………人間を辞めてるような奴だつてことがよくわかった。

「マジで…なんともないのか…？」

俺は戦慄していた。あれがRランク武偵……どんだけ出鱈目な奴なんだ。

（そう言や…なんだったんだ？）

俺は先ほどのトウジとの会話を思い出した。

武偵殺しの名前を言った時、アイツはなんと言うか…無表情になった。全く感情を感じさせない、そんな無表情だったが……アイツの無表情は怖い、とってしまった。

「……………気のせいかな？」

そう言つて、俺こと遠山キンジは、この屋上に上がってくるだろう女子生徒の話し声を聞き、咄嗟に出入口の陰にそそくさと隠れたのだった。

装備科専門棟の^{アムト}一室、開けっ放しの部屋のドアを軽くノックする。

「よっ、ミハエラ。丸一年ぶりだな」

「先輩っ！？お、お久しぶりッス！」

そこにいたのは大きさの合わない瓶底眼鏡を掛けた金髪の少女。

名前はミハエラ。名字とかはないが、他の武偵連中からはミハエラ・カラシニコフなんて呼ばれてる。

名前が、かの傑作アサルトライフルAK-47を産み出したミハエル・カラシニコフに似ていることと、銃……いや、兵器の設計に関して類い稀な才を持つからだろう。

俺の『ヴィレッタ・ムラマサブレイド』も、ミハエラがベレッタP92Fを元に、一から設計し直したオリジナルの銃だ。外見こそベレッタのバレルが少し長くなっただけのような姿だが、中身は全くの別物だ。

例をあげるなら……そうだな、もちろん違法なのだが『強装弾』を連続で使い続けても全く壊れない、と言った破格振り。

少々重いのが難点だが、それ以外は拳銃でありながら拳銃の域を越えたスペックを持つ怪物銃だ。

「おう。元気そうだがミハエラ。早速だけ頼めるか？」

「御安い御用ッス！」

俺が弾薬を抜いた二挺の拳銃をミハエラに渡すと、ミハエラは瓶底眼鏡の位置を直し、作業へと没頭する。

彼女が銃の事に没頭すると、集中し過ぎて30分は話しかけても何も答えない（ミハエラからは聞こえない）ようになるので、俺は近くにあった椅子に腰掛け、銃鍛冶の診断結果を待つ間短い眠りにつくことにした。

30分も寝れば眠気も覚めるだろう。

そう、俺はまだ日本に来てから一睡眠もしてなかったのだ。

スタイリッシュサボリ（後書き）

Rランク武偵とSランク武偵の簡単見分けかた

Sランク武偵：

達人技を使ったりして凄いけど、最後の一线で人間。
達人技でも、まだカッコいい！とか思えたり出来るレベル。

Rランク武偵（特にトウジ）：

超偵でもないのに物理法則を無視し始める。
物凄い怪物と一対一でやり合っても圧勝出来る。
人としてどうか軸がぶれてる。と言うより色々人間やめてる。

カッコいい！と思われるより、凄すぎてドン引きされるレベル。

こんな感じですね。ちなみに、武偵ランクをつけるなら問答無用で
《R》が付く教授。キンジ対教授戦で私が教授のチート加減に、私は
ドン引きしました（笑）

豪雨の中の追撃戦

「あゝゝ……だりいゝゝ」

俺がキライな物は世界で三つある。

一つは、女の子にモテモテなイケメン。

二つは、面倒なこと

そして三つ目は……雨だ。

ザーザーザーザーと降りしきる雨に俺のテンションはただ下が
り。

だって雨に濡れたら冷たいし、濡れるのが嫌だから傘使って片手塞
がるし、何よりじめじめしてて嫌だし。

……俺の経験則だが、昔から雨の日はついてないのだ。

授業の一時間目がはじまっているであろう今も俺は、俺しかない
このただっ広い部屋のソファに寝っ転がりながら愚痴を漏らし続け

ていた。

そんな時だった。

ブ、ブブブブブブブ……。

突然、俺の携帯が振動する。

「……………面倒臭え……誰からだ？……………」

携帯電話を開き、画面に表示されている文字を見て俺は小さく溜め息をついた。

「あー、もしもどちら様？」

非通知だったのだ。

《私は神埼・H・アリアよ！アンタ小波トウジよね？今仕事出来る状態！？》

電話越しに聞こえたアニメ声は、キンジが言っていた件のSランク武偵、神埼・H・アリアのかなり声だった。神埼に電話番号を教えたとつもりはなかったんだが……こいつ、事前に調べてやがったな？

「雨で気分が乗らん」

神埼の声から、切羽詰まっている状況だとわかるが、俺は雨が嫌いなのだ。

《はあっ！？今事件が起こってるのよ！？バ・ス・ジャック！！武偵高行きのバスに、爆弾が仕掛けられてるの！！装備で女子寮の屋上に今すぐ来なさい！！》

「面倒臭え。俺にやあ関係ない、頑張れ」

《なっ、なっ！、なな何言ってるんのアンタ！武偵の！仲間の命がかかってんのよっ！？》

……………俺のテンションが段々下がって行くのと比例して、電話口の神埼のテンションが跳ね上がっていくのがわかる。

ああ、マジで面倒臭くなってきたぞ。

《武偵憲章1条！『仲間を信じ、仲間を助けよ！』…………被害者は武偵高の仲間よ？わかったら速く来なさい！来なけりゃ風穴開けるわ

よ!?!」

「…………やる気が起きないんだよ」

その一言で、電話の向こうの神埼が切れた。

《ッ!?!…………アンタ…ねえッ…ならもう良いわよ! 私達だけで…ッ!》

《バカっ! 待てアリア!…………トウジ! 俺だ、キンジだ!》

切れて電話を切ろうとしたらしいアリアを止めて、キンジが神埼の代わりに出た。

《アリアの強引かつ一方的な言動は俺が謝る! だけど今は戦力が必要なんだ!…………頼む、トウジ!》

「……………」

別に神埼の言動に怒ったわけじゃない。本当に、ただ嫌なだけなのだ。

だが、面倒と言っただけで見捨てると言うのも『武偵』としては……いや、人として最悪だ。普段なら一も二もなく向かっていたのだが……本当に、雨の日はダメなのだ。ジnkス、とでも言えるだろう。嫌な想い出は雨の日ばかりだ。

俺の無言を拒否と受け取ったらしいキンジは、

《バスジャックの犯人は本物の『武偵殺し』らしいんだ。……頼む、トウジ!》

と言って来た。

「バスジャックの犯人は本物の『武偵殺し』らしいんだ。……頼む、トウジ！」

降りしきる雨の中、アリアから奪った無線機の方このトウジを『刺激』する。

この前屋上で話した時、トウジは『武偵殺し』と言う単語を聞き、少しおかしくなった。

どこがどう、と言うものではなかったが……トウジが少なからず反応を示した単語ワードしかもう残りの手はない。藁をもすがる勢いで、俺はトウジがこの単語に反応する事を祈った。

《武偵…殺し?》

反応した!!

「ああ、武偵殺した」

《……………俺はバイクで向かう。神埼へ変われ、ナビが欲しい》

無線越しにトウジが用意をし始め、ガチャガチャという音が聞こえ始めた。

「ああ、わかった。…………アリア、トウジはバイクで向かうらしい。ナビを頼むって」

不貞腐れたように頬を膨らませていたアリアへ、繋がったままの無線を渡す。

「ふん。アンタ、どういう心変わりなの!」

コラコラ、折角やる気になってくれたんだから刺激すんなっての!

「へ?……ふふん。わかればいいのよわかれば。ええ、こつちが補足しだい連絡するわ。それまでにアンタはポイント・73まで行っておいて。無線の周波数は……え?なんでわかんよ。……まあ良いわ」

そう言つて無線を切つたアリアは、

「行くわよ、キンジ」

上空に現れたヘリを見上げながらそう言つた。

……こいつ、こんなもん用意してたのかよ。手際が早すぎるっつの。

「ちつ……たく、本当に雨の日は良いことがないぜ!」

防弾サングラスを掛け、インカムを付けた状態でアーセナルに乗っ

た俺はこの雨の中、300km/h越えの速度で道路を走っていた。

「神埼、聞こえるか？ポイントまで後二分も掛からん。バスは見え
たか？」

アーセナル。俺が使うこの大型バイクは、多数の重火器を登載する
だけのために作られたわけじゃない。

あらゆる悪路を走破し、内蔵された無線にて無線連絡も可能なハイ
テクバイクなのだ。

……パリの装備科の奴等が嬉しそうに語ってたっけ。

俺の付けたインカムから延びたコードのプラグは、アーセナルの機
器に繋がれており、神埼達が使ってるであろう無線の周波数に合わ
せて俺は問う。

《本当に来た！……今レキが見つけたわ……ホテル日航前を今右折
したって！》

「あのホテルか……ん？……まさか……おいおい、……些か不味
いぞ神埼、キンジ！」

俺は一年ほどフランスのパリ武偵高へ交換留学生として留学してい
た。しかし、それ以前はここ日本、それもこの武偵高に近い武偵大
付属中学に在学していた。

一年のブランクはあるが、一年でそうそう町並みが変わるものか。
俺は慣れ親しんだこの街の地図を頭の中で広げ、バスの本来の巡回
路とバスの現在地を脳内で比較した。

《不味い？》

インカムからキンジの声が聞こえる。どうやらまだ理解には届いて
ないみたいだな。

「わからないか？……レキって奴、お前視力幾つだ？」

《左右、共に6・0です。》

「女の子！？……そうか、……レキちゃん、バスの行く先に……ト
ンネルは見えないかい？」

《何声でレキが女だってわかった瞬間、露骨に声色変えてんのよ、
この変態ブサイク》

「うるっせえよ幼児体型！変態なのは良いがブサイクとは二度と言
うんじゃねえぞ！ちくせう！！目から熱い雨が溢れて来やがった！」

《……見えます》

《誰が幼児体型ですってえッ！！？》

《少し黙れつてのエリア！……トンネル……トンネルトンネル……東
京湾トンネル……そうか、お台場か！？》

「ビンゴッ、だキンジ！」

300km/hで走りながらの思考は危ない。今もトラックにぶつかりかけた。

「お台場なんかで爆発されても事だ、東京湾トンネル前でヘリからバスへ飛び乗れるか神埼？」

《私を誰だと思ってんのよ、任せなさい！》

「良し……先の状況把握は任せた。俺もすぐに向かう！」

そう言つて、俺はアーセナルのハンドルを回す。

エンジンが唸りを上げ、身体に当たる風と雨が強くなる。

「見えた！……——つておい、なんだありやつ！！？……」

数分後、バスに乗ったと言うキンジと神埼の報告の後、視界の先に東京湾トンネルが見えたのだが……——

「トンネルが……氷の壁で塞がってやがる！」

俺は咄嗟にハンドルを切り、ドリフトをしながら横になった車体から分隊支援火器MINIMIを取り出す。

《氷！？》

「ああ、氷だよちくしょう！！」

MINIMIを片手で構え、氷の壁に向けぶっぱなす。

バババババババツッ！！……。

氷の壁は砕けながらも、かなり分厚いのか中々崩れない。ちくしょう、雨のせいもあるが、300km/hからのドリフトは簡単に止まらない。アーセナルはズシャアアッ！！と音を立てて道路を滑って行く。

「武偵殺しはどうやら超偵らしいな、クンがshit！」

片手で機関銃を撃ちながら、空いているもう片手をコートの中に突っ込む。

握られてるのは二個の手榴弾。安全ピンを口で抜き、氷の壁に向け投擲する。

狙いは氷の壁の上と下。ニヶ所を破壊して一気に進む！

ドカアアアッ！！

耳をつんざくような爆発は、見事氷の壁を粉碎しやがった。

「氷の壁を突破した。もう追い付けるぞ！」

ドリフト状態のアーセナルを立て直し、ハンドルを限界まで回す。

ぐにやり

一瞬、視界が捻れまがる。常人を凌駕する五感を有する俺でさえ一瞬、感覚が可笑しくなる速度。

これがアーセナルの限界速度……おいおい、メーター400を大きく上回ってんだが……ほんとにこいつの限界速度400なんだよな！！？。

俺はちょっとビビりながらもトンネルに入る。エンジン音がトンネルに響いてうるせえっ！

トウジが氷の壁を砕いてトンネルへ入って行ったのを見届けた影が一つ……。

目元まで隠れるようなフードがついたコートを纏い、薄い板のような物を取り出して耳に当てた。

「ああ、……奴の足止めに失敗した。機関銃と手榴弾で突破して行った。……『銃撃のトウジ』……確かに、我らに仇なす者達の中では正に最強、と呼べるだろう。……厄介だな」

そしてそのフードを深く被ったそいつは、板のような物を懐へしまし踵を返し、雨の街へ消えていった。

豪雨の中の追撃戦（後書き）

今話を一言で言えば……アーセナル無双、ですな（笑）

仮面ライダーで言うならサイクロン号など、仮面ライダーの相棒役のバイク！やはりバイクに乗る男たちはカッコいいですね。

トウジはまあ……アレですが（笑）

「うおっ！？なんだ今のっ！今度はオープンカーの上に載せてんのか！？」

トンネル内を走っていれば、炎上してるオープンカーが目の前に迫り、そのオープンカーにUZIが載っているのを見て思わず呆きれを通り越して驚いてしまう。

「たく、この『武偵殺し』さんは随分とシユールな事が好きなのかな……見えたっ」

目を細め、遠くに見えるバスを捉えた。そこには先ほど見たオープンカーと同じものが、UZIの射撃を食らったのか窓ガラスはすべてからく割れてボロボロになったバスの側面に回り込み、バスの屋上にいたキンジと神崎の二人を狙おうとしてる所だった。

《アリア——アリアああっ！》

インカムからキンジの叫び声が流れる。どうやら、神埼に何かあったようだ。

「キンジ！……クソッ、気付いてねえのかよッ！！」

耳元から聞こえるキンジの声は明らかに取り乱してるのが分かる。

UZIの銃口が今まさに二人に向け銃弾を撃とうとするのが分かる。

「バカ野郎が……マテバで狙撃とかやらせんなよッ！！」

アーセナルに跨がったまま、ヒップホルスターのマテバM2006を引き抜き、照準を一瞬で済ませ、俺はトリガーを引いた。

バンッ！バンッ！——

ギインッ…ガガガッ…ドカアアンッ！！

一発目はUZIを、二発目はオープンカーを弾丸をで貫き、コントロールを失なったオープンカーはドンドンと音をたて、壁に激突し、火花を散らしながら擦り続けた後爆破炎上した。

「キンジ！キンジッ！！」

《！？……と、トウジかつ、アリアが！》

オーブンカーの爆発と俺の声に、ようやく俺の存在に気付いたキンジが神埼を抱きかかえながら叫ぶ。

「死んじやいねえよ、心の臓腑は止まってねえだろう？。弾丸も額をかすっただけみたいだな」

《ほ、本当か！？》

俺は常人より高い身体能力を持つ。現実には、物理的に。

特に視力に関しては5.0を超える。レキちゃんほどではないが、約十数メートル……この距離でなら神埼の髪の毛一本一本まで細かく見える。

「気絶してるのは脳震盪のせいだろう、バス内に入れて額の出血の応急処置をしろ！バスの中じゃ応急処置くらい出来る奴がいるばすだ」

《わかった！。トウジ、お前はどつするんだ！？》

どうやらキンジは俺の言葉にある程度冷静を取り戻したらしいな。

「あ？……俺か？……」

外套のポケットから、二つの黒い手袋を取り出し、それを両手にはめる。

工具は……あつた。簡単なツールセットだったが外套の裏に着けておいてよかった。

「爆弾解体でもやろうかと、思ってる！爆弾は見つかったんだよね？」

「爆弾つ……車体の下だ、頼むトウジ！」

「あいよ！」

そう言つて俺はインカムを投げ捨て、バイクから飛び降り、バスの後部の、ガラスが割れた窓枠に掴まる。そこからバスの車体下に滑り込むように入り、爆弾を探す。少しでも気を緩めれば道路に身体がぶつかつてしまいそうだ。

俺がバスに飛び乗った事により制御を失つたアーセナルはグラグラとふらついた後にズシャアッ！と音を立て横転した。

こと車体の頑丈さに関しては、アーセナルが設計図の状態から俺が常々装備科アムドの連中に口が酸っぱくなるくらい頑丈にしると頼んでおいたため、ちよつとやそつとじゃ壊れないようになっている。

転ばしても塗装が剥げる程度だろう、後で回収すればいい。

「トウジ！液体窒素はないんだろ！？」

「当然！爆弾解体、と言うよりはその周辺機器の解体だ！」

バスの中腹まで来た俺は外套の中から7つ道具を取り出す。

まずは爆弾を覆っている箱を取り外し、スピード制限のリミットを解除する。そうすれば停車することも可能になる。

カチャカチャカチャ…キィ…

「……ッ！……」

爆弾の覆いを取り外した俺は思わず絶句した。

「……こいつは…不味いぞ……」

俺が見たのは、スピード制限により起爆するようにした装置と、

5…1 1…5…1 2…5…1 3と、時間を刻む装置。

二つの起爆装置がついた、速度制限式、時限式の両方で起爆する『オルタナティブ絶対不可避な二者択一』。しかもどちらとも解除しなけりゃ起爆すると言う鬼仕様。

そして、たった250gで旅客機を破壊出来ると言うあの……

「『セムテックス』……マジで、洒落になんねえぞ。」

それが約180g、余裕でバスごと吹き飛ばぜ。

「せめて速度制限式は外したいが……」

俺が7つ道具で解体を始めようとした時、屋上から発砲音が聞こえた。

パンツパンツ！

「キンジか！？何があつた！！」

「クソツ……またあのーが来——つた！それも六台も！」

バスの車体下にいるせいでキンジの言葉は飛び飛びにしか聞こえなかったが、大体わかった。

畜生、肝心な時にツ！

俺は7つ道具を外套内に仕舞い、おもむろに、手を離れた。

「グツ……うツ！……」

手を離せば落ちるのは当然だ。バスから落下した俺は道路を転げ回る。UZIを載せた無人のオープンカーが迫るのを感じ、外套から

二挺の銃を取り出す。

ドパパパパパッ！

人体工学に基づいた異形のプルバックサブマシンガン、『P90』だ。

ズシャアアッ！！

体勢を整え、野球のスライディングのような体勢で滑りながら二台のUZIを破壊し、UZIの車線を避けるようにUZIを載せたオープンカーに飛び乗り、UZIを引き抜いて車自体を破壊、ついで二台のオープンカーに向け掃射し破壊する。

これで五、残りは一。

ドパパパパパパパパパッ！！

二挺のP90からばらまかれた弾丸に撃ち貫かれ、オープンカーが爆散する。

この間、五秒。俺は弾が尽きたP90を捨てて、UZIだけを壊したオープンカーに飛び移ってまたバスの窓枠に掴まって下へ潜り込む。

場所がわかってる分先ほどよりも進む速度は早い。片手でバスに掴まりながら7つ道具で二度目の解体作業を急ぐ。

「っ!?!……ち、今のですか?……」

7つ道具を持っていた腕が自分の言うことを聞かず、小刻みに震えているのを見て舌打ちする。

痛みがないせいで気付かなかったが、これはどうやら、折れていないにしろ腕にヒビか何かが入ったようだ。

「ふん、腕の一つや二つ、……バスジャック解決後の、バス内の女の子達とのイベントがの為ならば……惜しくはない!」

「トウジ!トンネルを抜けるぞ!」

「マジか!?!……」

もうトンネルを抜けるほどの時間がたったなんて……まだ半分も作業が進んでねえのに!

ザーザーザー……。

バスはトンネルを抜け、橋にささしかかった。雨音が聞こえる……
……たく、本当に雨の日は嫌な事しかねえな。

カチャ…カチャカチャ…パキッ…

「うッし！キンジ！速度制限式の装置は終わらせた！減速し……—
—るなッ！減速するな！」

「ど、どっちなんだよトウジ！」

「減速するな！時限式になった途端、時間が短縮されやがった！」

そう、速度制限式の装置を解除した途端、三分以上あった時限式の装置が、残り……30秒になったのだ。

「ち……く、しょうツッ……！……最後はやっぱ力押しかよおっ……！！」

もう爆弾解体など間に合わないレベルだ。そう、解体など出来はしない。故に力技。

爆弾をバスから引き離す。

「う、うおおおおおッ……！！」

両手で爆弾の設置『箇所』を引っ張る。無理矢理引っ張りながらも、

衝撃を与えないように細心の注意を払う。

… 1 1 … 1 0 … 9 …――。

間に…合うか!?

バキバキと音を立てながら爆弾を引き剥がし、俺は爆弾を『抱え』ながらまたバスから落ちて転がり回る。

「こんちくしょう!」

視界の端に一瞬、遠くにあり小さく見えたが、車輛科のへりが見えた。

俺はそのへりがある方向へ、転がりながらセムテックスを投げ捨てた。

パンッ! …――。

一発の銃声が、雨音の中混じれて聞こえた。

次の瞬間、光と熱と、衝撃波が俺を襲う。

ドガアアアアンッ！！！！——

空中で狙撃され爆発したセムテックス。俺はその衝撃を真っ向から受け、

「うそだろおおおッ！！？」

橋の上から転げ落ち、海へ落下した。

海から引き揚げられたのはそれから30分後。警察やら何やらが引き揚げた俺に海藻やら魚やらが沢山巻き付いていて、土左衛門かと思われたらしい。

勿論、それを見ていたバス内にいた女生徒達からは気持ち悪いだの不気味だのいろいろ言われた。
ちくせう、命張ったのにこんな結末って……やっぱり、雨の日にはろくな事がない。

トウジが、雨天時の事件には二度と関わらないと強く心に決めた瞬間だった。

結論から言えば、バスジャック事件は無事解決。負傷者は二人だけ、それも軽傷と、バス一つ軽く吹き飛ばすくらいのプラスチック爆弾が仕掛けられていた割にはよい結果で事件は幕を閉じた。

だが、これはバスジャック事件。『武偵殺し』が起こした事件の一つが終わったに過ぎない。

そう、『武偵殺し』はいまだに捕まっていないのだ。

事件翌日、俺はバスジャックでも使われていた『武偵殺し』が使っていたサブマシンガンアムトを装備科のミハエラに渡していた。

「ミハエラ、何かわかったか？」

「うーん……なんの変鉄もないまっさらなUZIス。そういや最近仕入れ先からUZIがたしか……16挺だがパクられたって聞いた覚えが……」

「ビンゴ、当たりだミハエラ。キンジと俺が最初に潰したのが8、バスジャック時に潰したのが、神埼が一に俺が七。ピツたしだ。仕入れ先の情報教えて貰えないか？」

「おkッス。にしても先輩が自ら足使って犯人追うの珍しいッスね。なんかあつたんスか？」

ミハエラは机に広げていた、解体したUZIを退け、^{バラ}適当な紙を破りそこにさらさらと文字を書いた。

「……まあ、な。」

「……………京子さん……ッスか？」

紙を受け取ろうとした時、ミハエラは瓶底眼鏡を外し、その綺麗な目で俺を見上げて来た。

爆弾解体講座、無理矢理編（後書き）

今回、プラスチック爆弾は『セムテックス』にしました。

極小、高威力のセムテックスはマジで凄いッス。

そして出ました、皆大好きP90！正式にはPDW（Personal Defence Weapon）と言われるカテゴライズの銃です。

使用する弾丸が一風変わった銃でした。

ではまた次回。感想御待ちしてまゝす

狙撃の心

バズンツ！……カシャツ……カランカランツ……—。

装填、発砲、排莢。一連の動作を一回一回行いながら、トウジは人形の形的をスナイパーライフルで貫いていた。

「……ふう……」

計10発の射撃は頭部、そして胸部の中心の二ヶ所だけを貫いていた。

各5発づつその全てを二つの穴に放ったのだ。

寸分の狂いなく。

「……」

しかし彼の顔には喜びや、そう言った表情は浮かんでいなかった。

それもそのはず、彼にとって300m先の標的を射抜く程度は『必然』だ。

なら彼の表情に浮かんでるのは何か？

「ちっ……」

彼はスナイパーライフルのマガジンを取り換え、再び装填^{リロード}した。

このボルトアクション銃の名は『L96』。彼はいつも、心を宥める時に狙撃銃を撃っていた。

「ええ、ありがとうございました。では失礼します」

ピッ……。

やはり足を残してないか。UZIを盗まれたと言う業者へ電話をかけて見たのだが、盗まれたのを無くなってから気付いたらしく犯人に繋がるものは何一つ得られなかった。

「ま、そんな簡単にやいかねえか」

俺は小さく溜め息をつき、空が緋色に染まるのを見ながら病院へ向

かい歩き出す。

今回の事件の負傷者、その一人……神埼・H・アリアへの面会と足取り無しと言う報告をするためだ。

もしかしたら探偵科インクスタの連中が見つけたかも知れんしな。

病院までの道のりで、なにか土産物を買っていこうと思っていたら、視界の先にキンジが歩いてくるのが見えた。

キンジが歩いて来たのは病院の方向からだ。神埼に聞くより、キンジに『武偵殺し』の事を聞こうか。探偵科インクスタに頼んでいたのはキンジだしな。

「よ、キンジ。神埼と会って来たのか？」

「トウジ……ああ、会って来た」

キンジは苦虫を噛んだように顔をしかめた。

どうやら、何か言い合ったみたいだな。神埼と。

「武偵殺しの事については、なんかわかったのか？」

「いや、……何も掴めてない。『武偵殺し』が使っていたホテルが

見つかったんだが、宿泊記録も外部から改竄^レされていて、部屋も鑑^レ識^ビ科のやつらに調べてもらったが、犯人像に繋がるような痕跡は、全く見つからなかった」

「そうか……………」

「トウジはどうだった？」

「ま、おんなじ結果だな。『武偵殺し』ってのは桁違いに狡猾な奴だな」

「……………」

「……………」

言葉が止まる。夕暮れ時に差し掛かった街並みは、買い物客や学生らが多く見え、俺たちはその喧騒の中、ただただ黙って立っていた。

切り出したのは、キンジだった。

「トウジ……………一つ、聞いても良いか？」

「答えられる事なら、な」

「…………『武偵殺し』と、なんかあったのか？」

脳裏に浮かんだのは雨。昔、俺が強くあろうと心に決めたあの日。

「どうしてそう思う？」

内心の動揺を悟られぬよう、平静を装いながら問い返す。

「…………『武偵殺し』の言葉に、何度か反応してたから…………かな。屋上の時も、バスジャックの時もだ。もしかしたら、と思って『武偵殺し』って単語を使^{ワード}ったら、来てくれたろ？」

嗚呼、どうやらバレてるらしい。

「…………キンジ、…………すまんがこれはダメだ。まだ、言えない」

「どうしてもか？」

「ああ、…………まだな」

「そうか」

「すまん…………」

「気にするなって」

キンジはそう言って、軽く手を振りながら帰っていった。

バズンッ！……カシャッ…カランカラン…――。

無心になろうと思いつながらも、思い浮かぶ女性の顔。ミハエラとキンジとの会話で思い出してしまった女性。俺の命の……――いや、俺という存在の恩人。

「クソッ……何で当たるんだよ」

普通、こんな雑念を抱きながら狙撃をしても狙った場所には当たらないものだ。

だがしかし、この程度の距離なら『必然』として弾が当たる。意図的に外そうと思わない限り、彼は当ててしまうのだ。

普通ではない。普通では出来ない。

まだ外れてくれたなら苛立ちも収まっていたのかもしれない。

だが、彼は無意識に当ててしまう。

苛立つて、取り乱して、他の事を考えていても、当ててしまう。

こんな人常ならざる自分が、今は嫌だった。

パンッ！……—。

隣から発砲音が聞こえた。見てみると、ヘッドフォンを付けた小柄な少女がドラグノフ狙撃銃を構えていた。

「……………」

無口な少女はスコープを覗きながら次弾を放った。

パンッ……—。

狙撃科の訓練施設の射撃場。ここなら彼女が来ることになんの不思議もない。彼女は狙撃科のエースだからだ。

だから、彼女の長いまつげを盗み見て、トウジも次弾を放つ。

バズンッ！……—。

パンッ！……—。

バズンッ！……—。

パンッ！……—。

.....。

「.....」

「.....」

あれからなん発撃つたのだろうか。時間の感覚があやふやになっていたのに気づき、俺は腕時計を見て驚いた。

「うわ、もう夜の九時か」

仕方ない、片付けて帰ろうか、と思ってライフルを片付けようとしたその時。

「.....集中.....出来ましたか？」

酷く棒読みな彼女の言葉に俺は苦笑してしまった。

「ああ、集中できたよ。ありがとうレキちゃん。お粗末な腕でごめんね」

「……いえ」

どうやら、半分自棄^{ヤケ}になりながら撃っていた俺を見かねて彼女は隣に居てくれたらしい。

確かに、彼女が隣に来てから自然と焦燥感のようなものは失せ、ほぼ無心になって撃てていた。

「レキちゃんはまだいるのかい？それとも帰る？」

「……はい。帰ります」

「そっか……送ってくよ。それと、よかったらご飯でも一緒にどう？お礼がしたいんだが……」

「……風が……。わかりました」

彼女は小さく呟いき、ドラグノフ狙撃銃をギターケースに入れて小さくコクンと頷いた。

狙撃の心（後書き）

トウジ、レキたん^{レキたん}に癒されるの巻き。

レキたん可愛いよレキたん。（笑）

L96 狙撃銃。

^{イギリス}英陸軍の正式採用銃。

ボルトアクション^{ボルトアクション}が痺れる渋い狙撃銃です。
個人的に狙撃銃の中で一番好きかもです。

ではまた次回。感想お待ちしてます♪

帰郷のアリア

「よ、リーダーさん」

「げ、変態ブサ——」

「言ーうーなーよー！？言っなよ！ぜってー言っなよ！？」

「……不細工」

「言っなっつったろーが！！」

羽田空港にて俺は、トランク一つ持ち次の便を待っていた神埼・H・アリアを見つけた。

「なんの用よ、小波トウジ」

「んな邪険にすんなって。仲間の帰郷だ、見送ってやろうと思ってな」

「……ふん」

神埼が座っていた長椅子に俺も腰掛ける。

いやあふかふかだぜ。

「で？本当は何が目当てなの？」

「うわ、信用されてねー」

「あんたみたいないい加減な奴が、仲間とか大切にするわけないじゃない」

「ひでー、マジでひでー」

「ああ、もうっ…さっさと用件を言いなさいっ！でなきゃ風穴っ――」

「だあああっ！わかったわかったっての！だからこんな場所で抜くなって――」

神埼は苛立った様相で白と黒のコルトガバメントの二挺の銃口を俺の額に向けて来た。

「あゝ……その、だな。……なんつーか…頑張れ」

「……は？」

「……はあゝ………本当に、見送りに来ただけだったんだよ、俺は」

偶然、^{マスターズ}教務科の奴らが神埼がイギリスに戻ると話してたのを聞き、身体が勝手に動いていたのだ。

「一度だけとはいえ、同じミッションに挑んだ奴は俺にとっちゃ仲

間だ。」

キラリと歯を見せサムズアップ。イメージはイケメンな俺。

「キモっ」

「ぎいいいいやああっ!!」

ピシッ、ビシッ！俺の硝子グラスハートの心が今にも砕けそうだ。

「でも、……まあ………ありがとう」

神埼は俺を見ずに、だけど俺に向け確かに礼の言葉を言ってくれた。

「……七時………十九時の便だよな？」

「え？………それが何よ」

神埼のありがと、の一言で俺の神埼に対する評価は変わった。

我が儘でいけすかない幼児体型から↓我が儘だが意外と良い奴。しかし幼児体型。

「あんだ今すっごい失礼な事を考えたでしょ？」

「そ、そんなバナナっ!？」

こいつ、超能力を使える武偵…通称超偵だったのか!？。

「ごほんごほん……さて、次の便までの、神埼の暇潰しの為に一つ昔ばなしをしてやるか」

「は?……何よいきなり」

「いいからいいから……」

そう、神埼が良い奴だとわかったから………教えてやるのだ。

むかしむかし、あるところに、それはもう世界中の女性が振り向くようなイケメンな少年がおりましたとさ。

「偽った自分をそこまで持ち上げられる奴は世界中探してもあんたくらいね」

「うるせえええええっ!!黙って聞いてやがれっ!!」

……その少年は、こどもの頃、事故で両親を亡くしておりました。

そんな少年を憐れに思った一人の女性が少年を養子にしました。

少年と女性は数年間一緒に暮らして、本当の家族のように仲良くなりました。

少年は幸せで、この生活が末長く続く事を祈っておりました。

しかし、少年の幸せは長くは続きませんでした。

女性が、何者かによって殺されてしまったのです。雨がザーザーと降りしきる中、少年は何度も何度も女性の名を叫びました。

女性は、すでに声も出せないほど衰弱してしまっていました。彼女は震える手で、懐からなにかを取りだしました。

銃です。それは、彼女が大切にしていた拳銃だったのです。

女性の最期を看取った少年は、もう自分の大切な人達が傷つかないよう、守れるよう、強くなろうと思いました。

しかし、少年は数年たった今でも思い出してしまうのです。雨の音が思い出させてしまうのです。

だから少年は雨の日が大嫌いなのです。大切に想っていたあの女性の最期の笑みを、思い出してしまうから…… ———。

「おしまい、おしまい………っと。………これが、俺が仕事を涉った理由だって言ったら………笑うかい？」

短く纏めたつもりだったが、どうやら俺は話ベタなようだ。30分以上話してたらしい。

「笑うつ……わけ、ぐすつ、………ないじゃないっ」

神埼は、ボロボロと涙をこぼしながら俯いていた。

「うわっ、何泣いてんだよ」

「なっ、泣いてないわよっ！」

いや、ものっすごい勢いで泣いてんですけど……。

たく、なんだよ、こいつほんとに良い奴じゃねえか。

「ありがとよ神埼……話を聞いてくれて、さ。……そして忘れないでくれ。神埼にとって大切な事もあるだろう。けど、他人にも、他人なりの大きな理由があったりするんだ。まあ確かに俺は大した理由じゃねえさ。武偵として、やらなきゃいけない時に渋ってよ。……だけど、少しは相手を想ってやれ、今のお前に余裕がないのわかるがな……だけど、少しでも相手の事を気遣ってやれるようになりや……お前の良いところをわかってくれる奴が出てくる筈さ。絶対だ。絶対に、な」

俺はもう一度、ニカッと笑いサムズアップした。

「……顔はアウトだけど……」

パライインッ！！

割ーれーたーっ！！ついに俺の硝子^{グラスハート}の心が砕け散ったよーっ！！！！？

やめて！俺のライフはもうゼロよ！？

粉碎玉砕大喝采！！

イェアアアアッ！！

「中々カッコいいこと言ってくれるじゃない……………ありがとう、小波トウジ」

涙を拭い顔をあげた神埼。その神埼の笑みは、まるで女神のようである……………

あ、ヤベ……………これはロリに目覚めちまいそう。

「……………ふっ。まさかここでデレるとはなっ！しかーし！俺は口リコンでは——」

「誰があんたにデレるか、この変態っ！——」

「ぐぶおっ！——」

鳩尾へ爪先が食い込んだ。呼吸ができねえよ！！

「さて、そろそろ別れのお時間か？」

「そうね…少し余裕を持って乗りたいから」

神埼が長椅子から立ち上がり、トランクを手で引きながら歩き出す。

「にしても、来なかったなキンジ」

「……………あいつは…キンジは武偵を辞めるって言ってたわ……………だから、いいの」

そう言っつて神埼は俺に背を向けた。しかし神埼の表情は見ないでもわかる。とても悲しげな雰囲気で、見ないでもわかる。

「……………神埼」

「アリアよ」

「…は？」

「私の事は、アリアって呼びなさい。私もあんたの事はトウジって呼ぶから」

「……………デレた？」

「風穴開けるわよ？」

「サーせん……………じゃあ、アリア。…ロンドンでも頑張れよ？」

「わかったわトウジ。あんたも、こっちに來たら顔くらい見せなさい？」

そう言つて俺とアリアはどちらからでもなく、手を差し出し握手をした。

こんな小さい手で……………こんな小さい身体で、アリアは一体どんな物を背負つてゐるんだか……………。

「じゃあなアリア」

「それじゃあね、トウジ」

俺はアリアの姿が見えなくなるまでその小さな背中を見送っていた。

「もつか……速いな」

時刻はもう十九時を迎えようとしている。
その時だった……

「——武偵だっ！」

大きな声がターミナルに響く。

「キンジ！？……ッ！」

声の主を視認するや否や、俺は駆け出す。

虫の報せとも言つのか、俺の中の何かが駆けろと命ずる。

キンジはボーディングブリッジを突っ切り、今まさにハッチを閉じつつある機内へ駆け込んだ。

「ちっ、間に合わんか！」

俺は武偵徽章きしやうも見せず、キンジを追うようにゲートへ駆ける。

「邪魔だ…ッ」

警備員が俺を取り押さえようとするが、相手の手が俺を掴むより早く、俺は警備員を追い越す。

「ちいっ！……」

ハッチを閉じ、動き出した旅客機に俺は舌打ちし、ボーディングブリッジから飛び降りる。

「確かコンテナは……ビンゴ！」

今まさに離陸しようとする旅客機の底部荷物コンテナのハッチに飛び付き、俺は外套の中からある物を取り出した。

「持っててよかった全ての扉マスターキーを開ける鍵ってな！」

バズンッ！……—。

コンテナハッチを吹き飛ばし、俺は底部荷物コンテナ内へと進入した。

帰郷のアリア（後書き）

アリアとの恋愛フラグだと思ったら友情フラグでしたの巻。

思ったんだが、武偵だからと言って銃器を持って旅客機に乗ってるアリアって良いのか？

感想お待ちしてます♪

武偵殺し

貴族御用達の旅客機。豪華な飾り付けをされたバーで、俺達は『武偵殺し』と対峙していた。

カウンターに足を組んで座っていた女、俺がこの旅客機に入った際に揉めたアテンダントだ。

拳銃を向ける俺達に全く臆することなく、そいつはくふっ、とどこかで聞いたことのある笑い声を漏らした。

「今回も、キレイに引っ掛けてくれやがりましたねえ」

そのアテンダントは青いカクテルを、くいつ、と一口含んでから、……その顔に被せていた、薄いマスクのような特殊メイクを自ら剥いだ。

マスクの中から見えた素顔は……俺の良くしる、

「——理子!？」

「こんばんは Bon so i r キンジ。……そして、オルメス」

峰 理子。俺とアリアと同じ、二年 A の探偵科!インケスタ

「あんた……一体、何者……!」

理子が言った単語…オルメスと言う言葉に、アリアは驚愕の表情を浮かべ硬直した。

「理子・峰……『リュパン四世』——それが理子の、本当の名前」

リュパン……？リュパンって、まさかあれか？探偵科インケスタの教科書に載っていた、あのフランスの大怪盗。

アルセーヌ・ルパンの……曾孫だって言うのか！？

「でもね？家の人間はみんな理子を『理子』と呼んでくれなかった。お母様がつけてくれたこのかわいい名前を。……呼び方が、おかしいんだよ」

「おかしい……？」

アリアが呟く。

「四世、四世。四世四世四世ッ四世さまぁー。……どいつもこいつも、使用人どもまで……理子をそう呼んでたんだよ。ひつどいよねえ」

「そ、それがどうしたってのよ……一四世の何が悪いってのよ……」

なぜかハッキリとそう言ったアリアに、理子はいきなり目玉をひんむいた。

「——悪いに決まってるだろっ！あたしは数字か！？あたしはただの、DNAかよ！？あたしは理子だ！！数式じゃない！どいつもこいつもよォっ！！」

突然キレた理子は、俺達では無い誰かに対し、ここではないどこかに対して叫び、怒っている。グラスを床に叩きつけ、怒りを当たり散らすように割れたグラスを踏み砕いた。

「曾お爺さまを越えなければ、あたしは一生あたしじゃない、『リユパンの曾孫』として扱われる。だから！イ・ウーに入ってこの力を得た——この力で、あたしはもぎ取るんだ——あたしをッ！」

「待て、待てくれ！。お前は何を言ってるんだ……！？オルメスって何だ！イ・ウーって何なんだよ！『武偵殺し』は……本当に、お前の仕業だったのかよ！？」

「……『武偵殺し』？ああ、あんなの」

ジロ、と、理子がアリアを見る。

「プロローグを兼ねお遊びよ。本命はオルメス四世——アリア、お前だ」

その瞳は獲物を狙う獣の目。理子はもはやいつもの理子ではなかった。

「百年前、曾お爺さま同士の対決は引き分けだった。つまり、オルメス四世を斃せば、あたしは曾お爺さまを越えたことを証明できる

！……キンジい…お前もちゃんと、役割を果たせよ？」

獣の目が、俺を捉える。

「オルメスの一族には代々パートナーが必要なんだ。曾お爺さまと戦った初代オルメスには優秀なパートナーがいた。だから、条件を合わせるために一々お前をくっ付けてやったんだよオツ！」

「俺と、アリアを……お前が？」

「くふっ、そーだよーっ」

コイツ……いつものバカな理子は丸つきり嘘……演じてやがったのか、今まで……ずっと。

「お前のチャリに爆弾を仕掛け、わっかりやすうーい電波を出してあげたの」

「……私が『武偵殺し』の電波を追ってることに気づいてたのね……！」

「そりゃバカでも気付くよおーッ！……あんなに堂々と通信科コネクトに入りしてればねえー。でもおー、キンジがあんまり乗り気じゃなかったから……バスジャックで協力させてあげたんだあ」

「バスジャックもお前が……！？」

「そっ、……あの武偵ランク《R》とか言うバカに邪魔されたのは、ホンッとムカついたけどねえー」

「……何もかも……お前の計画通りだったってワケかよ……！」

「んー、そうでもないよ？予想外のこともあったもん。チャリジャックで出会わせてバスジャックでチームも組ませたのに——キンジがアリアとくっつききらなかったのは計画外だったの。それに、あのバカが日本に来たことも予想外だった。アイツ、授業中も、ずっと理子の事見てきてたんだからっ……動き辛いつて言ったらありやしないっての」

……いや、多分トウジの目的はお前の胸だ。

「それと……理子がやったお兄さんの話を出すまで動かなかったのは、意外だった」

兄さん。

「兄さんを……お前が……お前がッ!？」

兄さん。

俺の憧れで、尊敬できた人。

あの兄さんを、……『コイツ』がッ!!？

「くふふつ、ほらぁアリア。パートナーさんが起こってるわよおー？一緒に戦ってあげなよー！」

理子、さすが、怪盗リユパン四世だな。

ここもまた、テメエの筋書き通りってワケかよ……………！

「キンジ。いいこと教えてあげる。あのね？あなたのお兄さんは…
…今、理子の恋人なの」

「いい加減にしろッ！！」

「キンジ！理子はあたしたちを挑発してるわ！落ち着きなさい！」

「これが落ち着いてられるかよ！」

これ以上、死んだ兄さんを侮辱されてたまるかよ！

怒りのままに、ベレッタを握る右手に力を込めた瞬間、飛行機がまたぐらり、と揺れた。

「！」

「おーららッ」

気がついた時には、俺の手から——ベレッタが消えていた。

「ノン、ノン。ダメだよキンジ。今のお前じゃ、戦闘な役には立たない。それにそもそもオルメスの相棒は、戦う相棒じゃないの。パンプーの視点からヒントを与えて、オルメスの能力を引き出す。…
…そういう活躍をしなきゃ…」

うつとりと高説ぶった理子。その手には小振りな拳銃、ワルサー

P99が握られていた。

理子に撃たれ、俺の銃はバラバラになっていた。

アリアが……動いた！

ばんつ、と床を蹴ったかと思うと、二挺拳銃を構えながらアリアは理子に襲いかかる。

常に防弾服を着用している武偵同士の近接戦闘では、拳銃弾は一撃必殺の刺突武器になりえない。
打撃武器なのだ。

となるとモノを言うのは装弾数となる。

理子は16発のワルサーP99。アリアは装弾数8発のコルトガバメント二挺。銃口が二つのアリアが有利だ！

だが――、

「アリアあッ！！二挺拳銃が自分だけと思っちゃダメだよっ！？」

理子は叫びながらスカートを翻し、股下のホルスターからもう一挺のワルサーP99を取り出した。

「……！！」

互いの銃口が相手を捉える。

バババババツ！！

理子とアリア、二挺拳銃同士の近接戦闘が始まる。

「くッ…このっ！」

「あはっ！あははっ！」

武偵法9条。

『武偵は如何なる状況に於いても、その武偵活動中に人を殺害してはならない』

その法を遵守するため、アリアは頭部を狙えない。

そして理子も、合わせているつもりか、アリアの頭部を狙わない。

「痛ッ…たあいッ！！」

「うっ！？…」

アリアの弾丸が理子のわき腹を穿ち、理子はアリアの左肩を撃った。

防弾服による銃弾の貫通こそないものの、その衝撃は身体に走る。激痛に顔を歪めながらさらに接近する。

バツバババツ…

「——はっ！」

弾切れを起こした瞬間、アリアはその両脇で理子の両腕を抱えた。

二人は抱き合うような姿勢になり、理子の銃撃が止む。

「キンジ！」

「わかつてる！そこまでだ理子！」

俺な兄の形見のバタフライ・ナイフを手のひらの中で回転させて開く。

アリアの背後に突き付けた拳銃に注意しつつ、慎重に近づこうとした時……—

「『^{カトラ}双剣双銃』——奇遇よね、アリア」

理子が、クスクスと笑いながら呟いた。

「理子とアリアは色んなところが似てる。家系、キュートな姿、それと……二つ名」

「……？」

「あたしも同じ名前を持つてるのよ。『^{カトラ}双剣双銃のリコ』。でもね、アリア」

俺の足が止まった。そのありえない不気味な光景に、本能が警鐘^{けいしょう}を鳴らす。

なんだよ…あれは!?

「アリアの双剣双銃は本物じゃないり。お前はまだ知らない。この力を——!」

しゅる……しゅるるっ。

ニヤリと笑う理子のツースイドアップの、テールの片方が——まるで神話にあるメデューサの髪のように動いて——

シャッ!

背後に隠していたと思われるナイフを握り、アリアに襲いかかった。

「!」

一撃目は驚きながらも避けたアリアだったが——

ザシュッ!

反対のテールに握られていたもう一本のナイフが、鮮血を飛び散らせた。

「うあっ!」

アリアが……真後ろにのけぞる。

側頭部を斬られ、血が……紅い血が迸る。

「あは……あはは……曾お爺さま。108年の歳月は、こうも子孫に差を作っちゃうもんなだね。勝負にならない、お話しにならないよオツ！コイツ、パートナーどころか、自分の力さえ使えてないんだもん！勝てる、勝てるよ！理子は今日、理子になれる！あはっ、あはは……あはははははっ！！」

理子は訳のわからないことを叫びながら、狂ったように笑い始めた。

「アリア……アリア！」

ばたっ、と倒れたアリアに駆け寄る。顔面を深紅に染める血に瞼をきつく閉じながらも――アリアは、拳銃を離さずにいた。

ありえない……アイツは化け物だ。

とにかくアリアを連れて逃げなければ！

アリアを抱え欠けだそうとした時、足下をうち貫かれる。

「どこに行こうって言うの？……理子がオルメス四世を逃がしてあげると、思ってるの？……あははっ、アリアを殺さなきゃ、あたしは理子になれないんだからっ！！」

理子の両手に持った拳銃の銃口が俺とアリアを捉える。

不味い…アリアは今無防備だ。

咄嗟にアリアの上に覆い被さる。せめて、アリアだけでも！……

ダンッ、ダンッ！

二発の銃声が鳴る。俺は来るであろう激痛に耐えるように歯を食い縛った。

……あれ？……来ない？……

数秒待っても、痛みが来ない事に気づいた俺は、理子に振り向いた。

「お…まえはアッ！」

理子は両手を抱えるようにして痛みを耐えていた。その視線は俺達には向いていなかった。

カッン……カッン……カッン……。

ゆっくりと階段を降りてくる靴音。

一歩一歩をゆっくりと歩きながら、旅客機の二階から、バーへ続く

螺旋階段を降りて来た。

「よう、そこ行くお兄さん。……手を貸そうか？」

艶消しの黒いベレッタを片手で持った男は……

「トウジ……なんで、お前！」

武偵ランク《R》。世界に多くいる武偵の頂点のひとつに立つ男。

小波トウジだった。

「まあそこら辺は後回しだ……さて、紳士たるもの挨拶から入らねば。……『贗・武偵殺し』さんこんばんは……ってか？」

「え……にせ？」

俺の言葉に、トウジはニヤリと笑う。

「そりゃそうさ！本物の『武偵殺し』は俺なんだからよっ！……」

トウジは理子を一瞥してゲラゲラと笑い出した。……どういうことだ？驚きの連続過ぎて頭が付いて行けねえ。

「……ああ、だけどキンジ。俺はこんな殺人鬼、いや爆弾魔じゃねえぞ？」

困惑している俺を見て、トウジはかぶりを振る。

「……こいつはただの『連続武偵殺人犯』だ。『武偵殺し』の名を継承するにや……覚悟も何も足りなさすぎる」

トウジは何が言いたいんだ？……理子は『武偵殺し』じゃなくて……『連続武偵殺人犯』？……どこが……どう違うんだ？？。

まるで学校の先生のように人差し指を突きだしながら、トウジは続ける。

「……本来の『武偵殺し』はその名の通り、『武偵を殺す者』の名だ。だがな、キンジ……。俺達はある禁忌を犯した武偵しか殺さない」

「……禁忌？」

きんき……タブー……武偵法を破ったらか？

「ああ。しかし、武偵法なんかじゃないぞ？……もっと深く、武偵としてやってはいけないこと……」

トウジは一旦俺から視線を外し、理子を見た。

「俺達が殺す者は……『裏切り者』と、その者達を手引きし、庇護する組織……故の『武偵殺し』。裏切り者の処断こそが俺達『武偵殺し』に課せられた唯一の命！……ジャックなんてしないんだよ、俺達『武偵殺し』は、さ」

トウジは黒い手袋を手にしっかりとハメ、理子の前で徒手空拳の構えで立ちはだかった。

「来いよ『リユパン四世』。女の子一人切った程度で悦に入ってる
ようなお前なら殺すまでもない。……四肢を砕いて牢獄行きだ」

「あたしを……その名で呼ぶなあぁッ！！！」

先程トウジに落とされたワルサーを髪で広い上げ、理子は双剣双銃
の状態で襲いかかって来た。

トウジは構えといった構えを取らず、襲いかかる理子を見るだけだ。

武偵殺し（後書き）

まさかの設定。武偵殺しは裏切り者を処理する殺しを許可された殺人集団だった!？。

感想待ってます！

銃撃卿

襲いかかった理子が、吹き飛ばされた。

「ぐっ!？」

足を地面から離し、カウンターバーに突っ込んだ理子。

「拳銃だけが強襲科^{アサルト}の武器じゃねえんだぜ？」

トウジが黒い外套から取り出したのは散弾銃^{ショットガン}、ポンプアクション式の傑作銃レミントンm870だ。

防弾制服を着込んでいても、至近距離からの散弾銃の一撃を食らった理子は痛みを堪えながら腹部を両腕で押さえていた。

ガシャンッ!……—。

レミントンのフォアグリップを引き、排莢と装填を同時に行う『ポンプアクション』。

次弾を装填したトウジは、レミントンの銃口を理子に向け、

「ちっ…シクツたか」

小さく舌打ちしてから容赦なく次弾を放った。

ズガンッ！……—。

「お、おいバか！殺しちゃ——」

「誰が殺したつて？……たく、よくも俺のお気に入りパクリやがったな『りこたん』。料金はおっぱい一揉みだぞ？」

カウンターの椅子を吹き飛ばしたトウジはまたリロードし、肩にそれを担ぐように置いた。

「くふふつ。この理子さまにかかればお茶のこサイサイだよー！……今の一撃、倍以上の痛みで返してやるからな」

バーカウンターの上に飛び乗った理子は黒のスライドと銀のフレームの拳銃を二挺構えていた。

先程の理子のワルサーP99ではない……あれは……—。

「確か、ブレン・テン（Bren ten）！」

「ほう、よく知ってるなキンジ。ま、あれは9パラ仕様の通称ブレン・ナインだ」

「9パラって……テン（10）の意味ねえじゃんか！」

このブレン・テン、実はかなり性能の高い銃だ。しかし、通常の拳銃が9口径の9?パラベラム弾を使う所、専用の10?オート弾なる物を使っているのだ。10?であるが故に、9?パラベラム弾よりも強く、初速は他の拳銃の追隨を許さないほど速いのだが……つまり、トウジのブレン・ナインは最大の特徴を削ってしまった仕様なのだ。

「だって10?オート高いし少ないんだもん」

「いや、まあ確かにそのせいであんまり売れなかった銃だけどさ……ってなんで盗られてんだよ!」

「至近距離でぶっぱなした時だろうな。多分そのお得意の髪の毛でスツたんだろう?。よくもあの一瞬でやりやがったよ。キレた振りして俺が壊したワルサーを拾って盾代わりに使い捨て、俺から銃を奪う………そーだよな。イ・ウーなら当然俺の事も知ってたんだよなあ……」

トウジは肩をレミントンでトントンと叩きながら少しの間思慮の間を取り、

「キンジ、流れ弾食らいたくなきゃアリア連れて離れろ」

背を向けながらトウジはそう言った。

「だがっ……」

「やられねえよ。つか、俺が取り抑えちまうとアリアにキレられそうで怖いんだよな。つーことで速く起こせ」

トウジがショットガンを構えると、理子は双剣双銃の状態になり、臨戦体勢になる。

「……わかった。……死ぬなよ、トウジ」

「ばーか。誰にもの言ってるんだよ」

俺はアリアを抱き上げ、二階へ続く螺旋階段をかけ上がった。

「行つたな……さて、峰・理子・リュパン四世。まず先に、俺にとってお前らの爺さん達が怪盗と探偵で、過去に何があったかなんて関係ない」

「へえ」。『オルメス』でわかったんだあ。キンジはわからなかったのに」

「ご託はいい。それに理由もわかってんだろ？……俺は一年間フランスのパリにいた。だから知ってるんだよ、『オルメス』は『ホームズ』のフランス語読みだってな」

「くふふつ。流石『アーセナル歩く武器庫』、『フルメタル・センテンス銃弾の宣告者』……いや、『銃撃のトウジ』」

「やっぱり色々と知られてるみたいだな。……まあいいさ。理子、君が取るべき道は二つ、俺の質問に素直に答え拘束される事。そしてこの場で死ぬ、の二つだ。お薦めは前者だ」

「質問によるな。しかし、貴様の欲しがりそうな情報をあたしは持っているぞ？『銃撃のトウジ』」

ニヤリ、と笑った理子。勝利を確信した彼女は銃口を下げ、少しずつトウジの傍に近づいていく。

「お前の相棒だった『剣撃』の、事だろう？」

「！？」

「隙アリ」

トウジが動揺した一瞬を突き、理子はブレン・テンを構えトリガーを引いた。

ダンッ、ダンッダンダンダンッ！……。

カランカランッ……。

「なっ……！？」

理子の顔が驚愕から恐怖へと変わる。

ジャラ……。

トウジが掌を広げると、そこには数個の弾頭が握られていたのか、ポトポトと弾頭が床に落ちる。

距離にして三メートル……その距離で、不意を突かれていながらも放たれた拳銃弾を『掌で受け止めた』のだ。

「人の話は最後まで聞くべきだぜ、峰・理子」

咄嗟に、次弾を放とうとすると、足下に一発、弾丸を撃ち込まれた。

いつの間にかトウジの右手にはリボルバー『マテバM2006』。

高い身体能力を持つ理子ですら気づけぬほどの速度で抜かれたのだ。

「俺からの質問はコレだ。……『イ・ウー』を抜けて武偵に戻らないか？。様々な制約が付くだろうが、死ぬよりはマシだろう」

ジャコツ、と音を立ててホルスターに入れたトウジは、近くに転がっていた椅子を起こし、そこに座りながら口を開いた。

「……それが、今のが『フルメタル・センテンス銃弾の宣告』って？……ふざけんじゃ——」

「俺が殺した武偵の数は……前回で丁度99人だ。そして、その全員が殺される事を覚悟して殺された。……君は名前なんかの為に死ぬるのか？」

「なっ……！？……ふざけ……ふざけんな！アンタが、あたしのつ、理子の事の何を知ってるってのよ！なんか？なんかだって！？」

トウジが言った一言に、理子が激昂した。演技もへったくれもない。ただ、キレた。

「あたしは、理子だっ！理子なんだよ！……それを、否定された気持ちかわかるか！？」

そんな理子の言葉を、

「名前なんて軽い物さ」

真っ向から叩ききった。

「っ！？……銃撃卿ツ——……ッ！！」
ガンズ・オブ・ロード

ダアンツ！……。

「あぐっ！？」

理子がブレン・テンの引きがねを引くよりも早く、

「俺が殺した99人の奴等、その八割以上がSランク武偵だ。徒党を組んで俺に挑んだものもいた……だが、俺はその全てを殺して来た。中にはお前以上の超偵を相手にしたこともあった……それら全てを殺して来た俺に、激昂して周囲が見えなくなったお前が、勝てると思うてるのか？」

両肩をマグナム弾で穿たれる。

防弾制服により貫通はしないものの、銃弾の衝撃は無くせない。両肩に走った痛みに理子は両手のブレン・テンを落とす。

「……っと、残念だが……選手交代かな？」

抜いたマテバをホルスターに戻し、トウジは残念そうに苦笑した。

カンカンッ、という音と共に、

「ああ、待たせた」

螺旋階段を飛び降りて来たキンジ、そして――。

「峰・理子・リュパン四世！殺人未遂の現行犯で貴女を逮捕するわ！」

ガバメントを二挺携えたアリアが現れた。

両肩を痛めた理子に対し三体一。

勝ちだ。どうやったって理子が俺達を退けることはできない。詰みだ。

「…………で、りこりん。まだやるつもりか？流石にこの状況で勝てるとは思わないだろ？……俺は博愛主義者でね（美女に限り）、君をこれ以上傷つけたくない……大人しく縛ら……捕まってくれ！」

「今縛られてくれて言おうとしたわねあんた。どんだけ変態なのよっ！！て言うか、なんであんたがこの飛行機に乗ってるのよ！」

「ごめんごめんごめん、だから銃口を押し付けしないでええええっ」

ゴリゴリと銃口を押し付けられトウジが叫ぶ。すると、理子がクスクスと笑い始めた。

「くふふっ、なあんだ。お前もあたしと変わらない…変わらないだ。皮をかぶってる。……あたしを撃った時なんて無表情だったのに」

無表情……その言葉に俺はある場面をおもいだした。

脳裏に走った映像はあの時、屋上でみせた無表情のトウジだ。

あの無表情な顔がトウジの仕事をやる上で被る皮なのか？

「ねえ、銃撃のトウジ。あたし達の仲間に……イ・ウーにこない？
……」

理子がその童顔で妖艶な笑みを見せる。

「なっ…ふざけてるの理子!？」

アリアがガバメントを構えたまま驚きの表情を見せる。

「その通りだぜ、峰・理子。俺がイ・ウーに降るなんて……」
「」

「いまなら理子、トウジのしたいこと、なんでもしてあげるよお？」

甘い、とても甘い声で理子はトウジを誘惑する。

「なっ、なんでもっ!？」

「そっ。理子があ……ご奉仕しちゃうよ?」

腕で胸を挟むようにしながら、理子は猫なで声で首を傾げた愛くるしい動作は……

「うっ、うっごご奉仕!?!……………り、りこりんのおっぱいご奉仕! うひょー! 萌えて来たーッ!」

トウジの性欲制御装置を破壊するには十分過ぎた。

「めめめめ、メイド服っ! もちろん胸の谷間が見えるようばっくりと開けたの! そしてフリフリなミニスカートでお願い申し上げます! ……りこりんの黒ニーソ萌え。ハアハア…興奮してきた……………一発抜いてこよ」

「ここここここ、このド変態!! ここで風穴開けてあげるわ!!」

ダアンダアンダアンッ!!

アリアのガバメントから放たれた弾丸はトウジの脇腹を穿ち、トウジは悶絶しながら床を転げ回る。

「くふふっ。……………ねえ、キンジも来ない? この世の天国……………イ・

ウーに來ない？二人くらいなら連れてってあげられるよ？あのね、
イ・ウーには――」

理子はその目を鋭くしながら俺を見た。

「お兄さんも、いるよ？」

コイツ、また兄さんの事を――

「これ以上……怒らせないでくれ。いいか理子。あと一言でも兄さんの事を言われたら、俺は衝動的に『9条を破ってしまうかもしれないんだ』。それは、お互いに嫌な結末だろう？」

武偵法9条。武偵は如何なる状況においても、その武偵活動中に人を殺害してはならない。

トウジと言う存在がそれを否定しているが、基本的に武偵とは人の殺害をしてはならない。

「あ、それはマズいなー。キンジには武偵のままでいてもらわなきゃ」

理子はウィンクしたと思ったら、スカートをたくし上げ、何か丸い物を取り出した。

「うひょーっ！ーりこりんのおパン……っ！？、伏せるキンジ！

「アリアッ!!」

その丸い何かを見たトウジが声を張り上げ二人の前に仁王立ちする。

「それではそれでは、あたしたちはいつでも、三人を歓迎するよー
!.....ほいつ」

その丸い何かを背後の壁に投げ付け、壁に張り付いたそれが.....

.....

ドウツツツ!!..!

爆発した。

「——!」

壁に、大きく穴が開く。

理子はその穴に吸い込まれるように機外に飛び出ていった。パラシ
ユートも無しで——!!

「りっ.....」

理子！と叫ぼうとしたが、出来ない。

室内の空気が一気に引きずり出されるようにして窓に向かって吹き荒れる。

機内に警報が鳴り響き、天井から酸素マスクが雪崩のように飛び出した

バーにあった諸々の物が、窓の穴から吸い出されていく。

紙や布。グラスや酒のビン、そして俺やアリアも――

「――！？アリア！！」

「キンジ！」

穴に吸われながら、俺は咄嗟にアリアに手を伸ばす。
アリアも、俺に手を伸ばして来た。

俺とアリアの手がふれ合う瞬間、二人の手は無情にも離れてしまう

「何絶対絶命な時までラブコメやってんだこの馬鹿野郎共」

「なっ、なな！ラブコメって……っ！」

「……——悪いな、トウジ。お陰でアリアが助かったよ」

「なんか今のお前嫌いだ。フラグ建設者の臭いがする」

間に入ったトウジの手に引かれて、助けられて。

銃撃卿（後書き）

呼び名炸裂。いやあ、やはり二つ名とか異名とか考えるのは楽しいですね。

はい、アクション微妙のストーリーー微妙回です。

え？普段から？……ですよー。

とりあえず第二巻辺りになればオリジナルストーリーーに着手できる！

感想待ってまゝす

傾国の姫

「あー、……首いてえ」

まどろみの中、目を開けるよりも先に首の痛みを覚える。

寝違えたか？ いや、なんか頭も痛いな。

重い瞼をゆっくりと開けて、俺は呟いた。

「知らない……天井だ」

何か言わねばならないような気がして、呟いてしまった。仕方ない、宇宙の法則だもの。

まあ宇宙の法則は置いといて……ここは、どこだ？。

「……病院、か？」

この無駄に清潔感溢れる部屋の感じは多分病院だろう。白い物ばっかだし。

病院だとして、なんで俺はこんな所にいるんだ？俺は何をしていた？。

……… ああ、思い出した。あの後、どっかから放たれたミサイルが旅客機のエンジン四基の内二基にぶち当たって、燃料漏れで墜落しそうになっていたのをアリアとキンジがどうにかして立て直して…… メガフロート 人工浮島に着陸したんだっけか。

んー…… 頭打って気絶してたのか？……… だせえっ（笑）

「よつと…… あゝ、なんか身体の節々が痛え」

起き上がった俺は自分が患者着を着ている事に気づき、棚の上に置んであった防弾制服の隣に置いてあった『マテバM2006』と『ヴィレッタ・ムラマサブレイド』を手取る。

ん、弾も入ってるな。

弾丸を確認した俺はナースコールを押す。
来てくれるのが美人なナースさんなら嬉しいのだが………

数分後、俺がいた病室には黒いスーツに黒いサングラスと、俺とタメを張れるくらい全身真っ黒な厳つい強面の野郎達がいた。そう、達、とつくように複数だ。計五人。全員待機の姿勢だ。

……………暑苦しい。こつも男しくない空間にいと発作を起こしそうだ。

「小波トウジ。今回のハイジャック事件、その顛末について聴取させて貰おう」

厳つい野郎Aがサングラスの奥から俺を見下しながら言う。

「…………お前ら、公安0科だな？…………今は気分が悪い…帰ってくれ」

「そうはいかない。今回の事の実偽は早急に知る必要がある。この質問に対する答えは絶対だ。それに、小波トウジ。我々は貴様に対する執行権がある。…………よもや忘れたか？」

「…………遠山、神崎、両武偵からの聴取はしたのか？」

「無論、その上でお前からの聴取をするのだ。なぜ、貴様が峰・理子・リュパン四世を殺さなかったのか…………その理由もな」

奴等の目的はそれか。……ようは俺の拳げ足を取って、俺が『武偵殺し』として不適合と証明したいのだ。

俺は『武偵殺し』として、武偵以外の敵対組織を壊滅させたことが何度かある。奴等にとって俺は仕事を取るハイエナ、邪魔な存在なのだ。

だから俺が『武偵殺し』として人を殺せないようにするため『武偵殺し』を解任させようとしてるのだ。

「峰・理子には『交渉中』に逃げられた。故に殺そうにも殺せなかった」

『武偵殺し』も武偵だ、甘い所がある。

それが『交渉』だ。

武偵を裏切ったものたちにも裏切る理由が少なからずある。敵対組織にその理由を付かれ、半強制的に利用される者もいる。

そんな者達に対する最後の慈悲。

例えば、……難病にかかっている家族がいるとする。その家族を治すには現代の生きてでは難しい。しかし、その組織は治せる技術を持ち、それを餌に武偵を裏切らせたりした場合。その家族を救うために裏切ったと言うのなら、現代医療だけでなく、治療特化の超偵を出動されれば良い。

無論、出来ることと出来ないこともある。

だが、この交渉の制度で殺さずに救えた者もいた。

しかし、そんなのは極少数だ。基本的に裏切る奴等には『交渉』程度では動かない。

退くことは叶わない。そんな切羽詰まった状況の奴等と対峙したことはほぼ常だ。

こちらの『交渉』を真っ向から信じてくれる奴もまた、稀なのだ。

愛するものを治療不可能な難病から救いたい。

俺はそんな感動できるだろう『想い』を踏みにじったこともある。

全うに武偵として生きていれば大成出来たであろう奴等を、殺して来た…………。

……………話がそれたな。

基本的に『交渉』が終わるまで、『武偵殺し』は武偵を殺せない。

故に、峰・理子への『交渉』が終わっていなかった俺は峰・理子を殺せなかった……………と言うわけだ。

「ふん……ぬるま湯に浸かった武偵らしい言葉だな。武偵殺しは武偵殺しらしく、裏切り者の始末をすればいいものを……だから我々が尻拭いに走らされる」

尻拭い？……………尻拭いだと？

なんだ、こいつら。何様だ？

裏切り者の始末だと？……………全員が全員裏切りたかったわけじゃねえんだぞ？……………。

「そこら辺はテメエらの上に言いやがれ。交渉制度は正式に認められた武偵殺し……………いや、俺達『黒き風人』^{ストームブリンガー}の制度だ。……………いいか？俺は武偵だ。救える命を救うのが武偵だ。……………最後の一线は踏み外さねえ。テメエらみたいなただの人殺しにやあならねえッ！」

正式名称『黒き風人』^{ストームブリンガー}。身内すら殺すその存在意義から物語の魔剣の名が付けられており、『武偵殺し』はその活動が、裏切り者の武偵を殺す事に由来する通り名の一つだ。

俺達が武偵を殺すのは最終手段だ。故に、殺す事を必然と思ったりするような者はいない。いるわけがない。

久しぶりにキレた俺の言葉に怒りを露にした男達は懷から銃を取り出す。

「小波トウジ。貴様に対する執行権を発動する！」

五人の銃口が一斉に俺に向けられる。

「バカ野郎が。……病院で銃なんて抜いてんじゃねえよッ——」

ダンッ、ダンダンダンダンッ！——。

奴等がトリガーを引くよりも早く、ベッドの掛け布団を翻し、公安0科のエージェント達の視界を一瞬だけ覆い、撃鉄を下ろす。

構えた二挺の拳銃から放たれた強装弾とマグナム弾は翻った布団を貫き、その全てがエージェントが持つ拳銃の、銃口の中に吸い込まれるように入っていた。いつかキンジがやった曲芸の真似だ。

「ぐっ！？」

「があっ！？」

エージェント達が持つ拳銃が吹き飛び、その際起こった衝撃による痛みにエージェント達は皆一様に痛みに悶える。

「俺を殺すってんだったら、まず一個師団の兵力で攻めてこい。話はそれからだ。《R》舐めんな」

ベッドから降りた俺は壁に掛けてあった黒い外套を纏って、制服を掴んでその病室を後にした。

「……で、この間の事件の真偽を問いに来た公安0科の連中を華麗に倒し、華麗に病院を立ち去ったと。……………先輩、それ嘘ツスね？」

「なっ！？う、嘘なんかじゃねえしっ！」

「んな訳ないじゃないツスカwww」

「むっ……。なら、嘘だと思っ理由を述べてみよ」

「おkツス。……………まず、先輩がキレて銃を抜かなかった時点でダウトッス。先輩キレたら口より手が出るタイプですし。多分、0科の連中が抜くより速く撃って……………そッスね、布団越しに撃ったのは本当っぽいけど、鳩尾^{みそおち}辺りに弾丸撃ち込んで悶絶させてたんじやないツスカ？」

「……………なんでわかるの？」

「先輩との付き合いは長いツスから」

事件から数日後、バスジャック時に損傷（軽微だが）したアーセナルをパリの武偵高に修理に出していたため、徒歩で武偵高へ向かっていたら、同じく徒歩のミハエラとバッタリあってしまったわけだ。

ちくせう。いい格好しようとしたがバレてしまったとは……情けない。

「何言ってるんスカ。0科の連中を瞬殺（殺してはない）できるだけで十分過ぎるッスよ」

ミハエラが瓶底眼鏡をかけ直しながら呆れたように言う。あれ？俺口に出してた？……まあいいか。

「そうか？……女の子が見てたら惚れるかな？」

「キレやすいって思われるかもッスね」

「あ、アウトじゃんっ！」

ちくせう、俺がキレるのは野郎だけなんだがな……確かに、キレ易い男はモテないな。……それでもイケメンはモテるんだろうなあ

）
……。

「まあ……その、私は先輩の事……カッコいいって思うッスけど
……」

「んあ？……なんか言ったか？」

「な、なんでもないッス！！」

「？」

ゴニョゴニョとしたしゃべり方で聞こえ辛かったんだが……まあ無
用な詮索はしない。それが武偵だ。

「トウジ！」

「ゲ、……噂をすれば変態じゃないっ」

「いようっ、ご兩人！。朝っぱらから仲良いねえ！このっ、このっ
……爆発しろ」

ミハエラと共に教務科へ向かおうとしてたら、教務科の前にある掲

示板前で立っていたキンジに声を掛けられた。

冷やかすつもりが軽く鬱入りかけちゃまったじゃねえか。

「先輩、この二人がその？」

「おう。エアジャックン時に旅客機を飛ばしたロリコン野郎の遠山キンジ。こっちのつるぺたロリータが神埼・H・^{ホームズ}アリアだ」

「ちょっと待て！誰がロリコンだ誰がっ！……って、知ってたのか！？アリアが……」

「勿論。俺が一年間どこに留学してたのか考えてみる。しかもあの四世がオルメスオルメス言ってるんだぜ？……少し考えりゃバカでもわかるぞ？」

「ぐっ……」

キンジは悔しげに歯を食い縛った。あ、気づいてなかったのか。……

「フフン……（どやあ）」

「そのム力つく笑い方はやめろ」

「おっと」

思わずドヤ顔してしまったぜい。

「私は一年間C組の装備科、ミハエラつて言います。それで、そのロリペド野郎の遠山さんは何故掲示板の前なんかでイチヤイチャしてるんで？。思わずリア充爆ぜると言いたくなっちゃうんすけど」

「なんかもつと酷くなつてないか！？それにイチヤイチャなんかしてないんだけどな……………ええと…見た方が速いよな。これを見る、トウジ」

ミハエラの言葉に軽く落ち込みながらキンジは掲示板の方に視線を向ける。

「どれどれ？…………生徒呼び出し、二年B組超能力捜査研究科。星伽白雪。二年A組強襲科、…小波トウジ。…………え？俺、なんかした？」

掲示板には俺と女の子らしき名前が書いてあった。

「先輩、公安0科の件じゃないツスカ？」

「それに関しては蘭豹女史からお褒めの言葉を頂いたぜ」

「なんて言われたんだ？」

「『よくやった。だがまだ甘い。次は脳ミソぶちまけてやれ』って」

「あの教育者崩れなら言いかねないな」

キンジが頭を抱えながら溜め息をついた。

「んー、マジで身に覚えがないんだが……。この白雪って子に関係してんだろつか？」

「白雪に？」

何気なく呟いた言葉にキンジが食いつく。

「知り合いか？」

「ああ。幼馴染み——」

ガウンガウンッ！

「……先輩、幾らロリコン野郎の遠山さんがリア充だからって流石に抜くのは不味いですって」

「イケね。つい冷静にドジったぜ」

「こっ……ここ、殺す気がバカ野郎！！つか冷静にドジったってどう言う事だ！！」

思わず抜いていたマテバから放たれた銃弾は二発。二発ともキンジの顔の直ぐ横を掠めて壁に食い込んだ。

「いやあ、キンジが幼馴染みなんて言うからさ。ほら、俺ってモテる奴嫌いだろ？……つい、…な」

「知らんわっ！何がつい…な。っだ！ついじゃないだろ！……ったく、しかも白雪とはそんな関係じゃないって」

「…朝起こしてくれる？」

「え？……まあ、白雪の鳴らすチャイムで大体起きるが」

「朝食は？」

「白雪が作ってくれたりする」

「昼飯は？」

「白雪が作るうとするけど流石にそこまでやらせられないから購買とかで済ませてる」

「……………ミハエラ、判決は？」

「銃殺刑ツスね。『ニードルハンマ針槌弾』の予備ありますか先輩？」

「心配するな。キンジを殺るには十分な量だ」

「おいおいッ！何んだよ！今の問答で殺される事にならなきゃならんっ！？。くっ、アリア！アリアからもなんか言ってや——……」

「……だっただだだ誰のどこがつるぺたでえすつてえええええつつ……！？」

「あ、キレた」

さっきから黙ってたと思ったなら怒りに耐えてたのか。

あ。アリアが日本刀抜いた。

「……さて」

昼休み。教務科のある教師の個室の前に俺は立っていた。ある物を持って。

「強襲科の小波です！」

ドアをノックしつつ自己アピール。

「ほーい、開いてるよオ」

ドアの向こう、部屋の中からどこか間延びした声が聞こえた。部屋の主の許可が得られた所で、俺は持っていた、『真っ赤な薔薇の花束』を前面に向け

ながら入室する。

「貴女の愛の奴隷、小波トウジです。綴先生、良ければ今度ディナ―でも……」

「似合わない事してないでそこ座って……」

「あ、はい。すみません」

煙草をふかした黒髪のおかっぱの女性。彼女の名は綴梅子つづめこ尋問科の教員だ。

「ふうー……えーっと、何処まで話したっけえ？……あー、思いだした。……でえだ。ここにいる小波トウジが、星伽……あんたのボディーガードに付くからあ」

と、くわえ煙草をふかす。

流石綴先生。タンクトップに黒のコートとかエロ過ぎです。

……え？

「……うわっ！？すげえ美女がいるっ！！」

綴先生の姿に見惚れていた俺は先生の突然の言葉に一瞬思考が停止

した。

先生の視線が俺とは全く別の方向に向いているのに気付き、要約俺は先の綴先生の言葉を理解した。

そこにいたのは、例えるなら一輪の華。

腰まで届く艶やかな黒髪。目が大きく、端麗な容姿。

キュッとしまったウエストに、武偵高の防弾制服のスカートから伸び出た瑞々しい肉付きをしながらスラッと伸びる美脚。

座っているながらも目に入るその安産型の美しい尻。

そしてそして、そのロケットおっぱい！たゆんたゆんの巨乳は下着による偽乳ではないはずだ！

そして大和撫子と言う言葉を擬人…具現化しましたと言わんばかりの大人しそうな雰囲気！！！！

超好み。メチャ好み。

そして綴先生はこの星伽って娘のボディーガードに俺を選んだらしい……………ふっ、ふふふふふっ！！

ボディーガード？望む所だ！あらゆる障害から君を守ってみせるぜ星伽さん！！そして俺の漢気おとこぎに絆ほどされ身も心も俺へ差し出す星伽さん。

……イケる。イケるぜっ！！

「綴先生。そのボディーガード、俺がひき……」

「——そのボディーガード、あたしがやるわ！」

「……は？」

俺がイケメン顔でボディーガードの任務を受けようとしたら、どこからかアリアが室内に現れ、ニヤリと笑ってその任務をかつさらっていった。

「う……うおっ！？」

「むきゅっ！？」

べちゃ。

しかし、そのアリアは上から降ってきたキンジに押し潰されてしまった。

見れば、人が入り込めそうなダクトから本来あるはずの通気孔の力バーが外されていた。

アリアはこのダクトから現れたに違いない。

「き、きき、キンジ！ヘンなところにそのバカ面つけるんじゃないにゆえー！？」

顔を真っ赤にしながら怒鳴るアリアは綴先生にネコ掴みかれ持ち上げられた。

起き上がったキンジも右に同じ。襟を掴まれ、
ダンッダダンッ！

アリア共々壁に向け投げ捨てられた。

壁に投げつけた二人の情報を口に終わった綴先生は新しい煙草に火を付けた。

「でえー？どういう意味？『ボディーガードをやる』ってのは」
ぷふあー。と煙りを吐き出しながら気だるげに綴先生はアリアに問う。

「そうだぞアリア！星伽さんは俺とくんずほぐれず床上大運動会を
……」

「黙ってなさい^{ドヘンタイ}弩変態っ、風穴空けるわよ！？……ふん。言った通りよ。白雪のボディーガード、二十四時間体制、あたしが無償で引き受けるわ！」

「バカ野郎！俺なんて年中無休、ベッドからおトイレまでどこでも護衛を……うッ！？」

「だまっ て な さ い っ て 言 っ た わ よ ね
え ？」

太股のホルスターから抜いた二挺のコルトガバメントを俺の眉間と顎に突きつけたアリアは見惚れるような笑みを見せながら殺気を俺にぶつけて来やがった。

怖え。

コクコクと何度も首を縦に振った俺に満足したのか、アリアは俺の眉間に銃口をグリグリと押し付けながら星伽さんに視線を向けた。

流石に、零距离で生身の頭をぶち抜かれたら死ぬ。俺はまだ死にたくないのでプライドを捨て従順な犬を演じ非抵抗を示したのだった。

「っと言っわけでコイツは白雪のボディガードから解任。それに私達は無償でやってあげるわ！」

「……星伽い。なんか知らないけど、Sランクの武偵が無料^{ロハ}で護衛してくれるらしいよ？」

黒いコートの裾を揺らして振り返った綴先生に星伽さんは、

「い……嫌です！アリアがいつも一緒だなんて、汚らしい！」

ツーンとそっぽを向いた星伽さん。

ジャキッ！……

「——あたしにボディーガードさせないと、コイツ撃つわよ？」

そしてトリガーに指をかけるアリア……——っておおおおい
っ！！？

やめるアリア！こんな方法、白雪さん（今から呼び始めた）が悲し
む！俺は女の子が悲しむ所なんて……——！

「別に良いよ」

そうそう、涙ぐみながら従っ………てねえええっつ！！？

見捨てた！俺を見捨てたよ白雪さん！しかしそんな冷やかか所も可
憐だぜ白雪さん！。

しかしやべえ！最近調子乗りすぎてフツメンだって事忘れてたぜ！
！このままじゃ殺られちゃうっ！

「コイツの血が付くわよ？」

「それは貴女も同じよ、神埼・H・アリア！」

「確かにそうね。じゃあキンジを撃つわよ？」

「じゃあってなおいっ！？ぶ、武偵法！武偵法9条！」

「そつ、そんなっ！？……き、…キンちゃん！」

俺からキンジのこめかみへと銃口をグリグリと押しつけるのを、白雪さんは、はわっ！と両手を口にあてて慌てる。

なんつーか、俺との温度差激しくない？

「……で、仕事が無くなったんで帰りますね？」

俺が椅子から立ち上がればアリア達を見ながらニヤニヤしていた先生が煙草を大きく吸って、それを俺に向け吐き出した。

「ふう〜……いや、小波の仕事はまだあるんだよねえ」

騒ぐ三人を捨て置き、先生は二・三枚の紙を取りだした。

「アドシールド終了までの要人警護がアンタの仕事。命令だから拒否は聞けないぞ〜」

「また面倒くさい仕事を……まさか、最初は俺に白雪さんとその要人のボディーガードをやらせようとしてたんですか！？」

「おお〜。よくわかった。誉めてやるオ」

よくわかったって……アリアが来てくれて助かったな。

「で？その要人の名は？開始期間は？特筆事項は？」

俺が立て続けに質問すると、先生は視線を斜め上に向けた。

「そろそろ来ると思っただけだなあ。道に迷ったかあ？」

壁に掛けてあった時計を見ると、頭をポリポリと掻きながらまた数枚の紙を眺め始めた。

その時だった。この綴先生の専用の部屋の外から声が聞こえた。

「ここか？」

「はっ、はい！教務科の綴梅子の部屋でしたら確かに……」

「そうか、それは助かった。すまなかったな、余計な手間を掛けさせた」

「き、気にしないでください！じゃ、じゃあ僕は……これでっ」

「ああ。ありがとう」

外から聞こえたのは落ち着いた女性の声とやや興奮ぎみの男子の声。

会話が終わったと思ったらこの部屋のドアがノックされた。

「開いてるよオ」

綴先生が間延びした声を出すや否や、ドアノブはガチャツ、と音を立てて半回転した。

「すまない、ミス・ツヅリ。道に迷ってしまってな」

開かれたドアから現れたのは膝まで伸びた美しい銀髪と碧眼、白雪さんをも上回るプロポーションを持った超絶美人。

その銀髪美人はお姫様が着るような純白のドレスを着ていて、さながら……いや、まさに本から飛び出た物語のお姫様のような。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

上からキンジ、アリア、白雪さん、俺である。

あまりに美しく、あまりに武偵高に似合わない風貌のお姫様の登場に騒いでいた三人もただただ茫然と現れたお姫様を見つめている。

「ん、いいよオ。…ほい、クライアント依頼人だよ」

お姫様に見惚れていた俺の頭をまるでドリブルするかのように強く叩いた綴先生はニヤニヤと笑っている。

「……貴女が…依頼人？」

「ん？………ぷっ、ぷぷっ！」

俺が聞くと、そのお姫様は一度首を傾げた後、片手で口を隠しながら肩を震わせて笑った。

「え？……あ、その………なんか笑えること、言いましたか？」

情けないことながら、あまりにも人間離れた美しさに萎縮しまくってます。だって、なんか後光とか見えそうくらい美人なんだぜ？

髪とかサラサラで、髪の毛の一本一本がきらきらと輝いてし。キューテイクルがヤベエ。

寧ろ女神とか言われた方が素直に頷けるんだが……。

話が逸れたな。

お姫様は心底可笑しいらしく、肩を震わせ続け、ようやく収まったかと思ったら、ニヤニヤと笑いながら、

「くくっ。……いやはや、気づかぬものだな。いや、仕方ないか？

……流石にあれから三年じゃし、気づかぬのも道理じゃの」

いきなり口調を変えて来た。

「!!!!!!!!!!!!????????」

その時、俺に衝撃が走る。そりゃもう雷が落ちた時以上の衝撃だ。
……そう、この口調に……この声、知っているのだ。

「まで、までまでまでまで……まさか……だが……出身地は？」

「フランスのオルレアンじゃ」

「マジで……マジかよ……もしかして……あの、姫……さん、なのか？」

恐る恐る。俺は信じらないと頭の中で叫ぶも、現実はそのを否定する。

「その通り。儂こそ、フランス王家の血を引き継ぎし後継者。シャ

ルロツテ・ヴィギン・オルレアンじゃ！……………我が騎士トウジよ、
もう…………チビ姫とは言わせぬぞ？」

…………その姫様は、心底嬉しそうにそう言ったのだった。

傾国の姫（後書き）

二巻突入！

そして新キャラ登場！

オリジナルだけど（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6450x/>

緋弾のアリア ～最強のフツメン男～

2011年11月17日18時31分発行